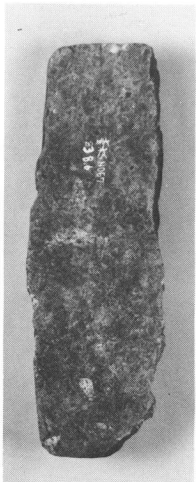


19. 南区第1号集石址(上) 20. 第2号集石址(下)

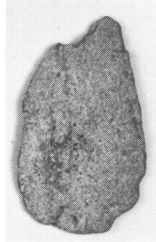
21. と石 (No.67)



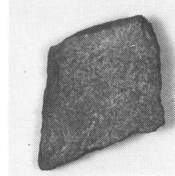
22. 敲打器 (No.99)



23. 剥片石器 (No.92)



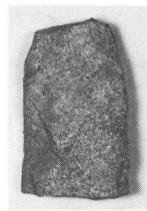
24. 打製石斧 (No.94)

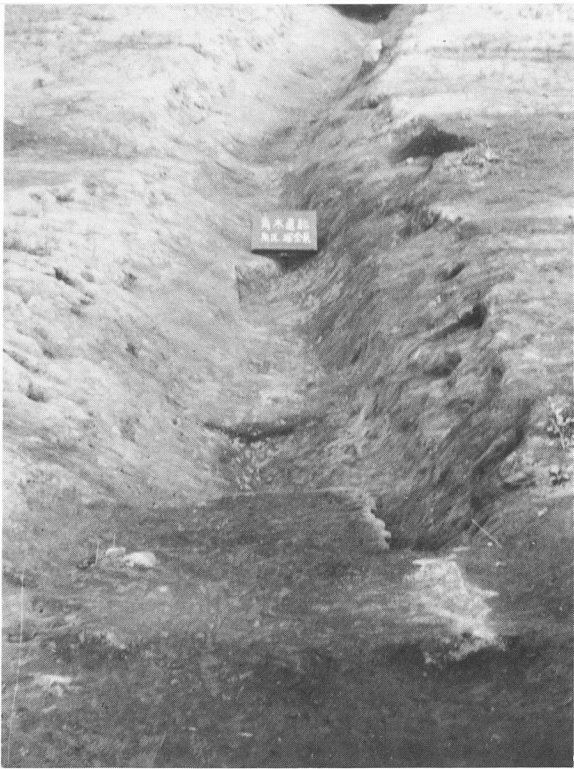


26. 打製石斧 (No.79)



25. 打製石斧 (No.101)

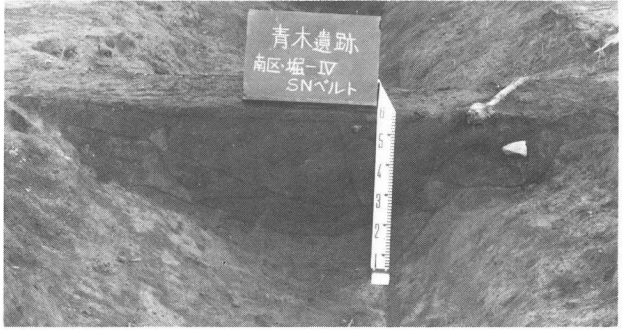




27. 南の堀全景（調査終了）



29. 南の堀Vベルト

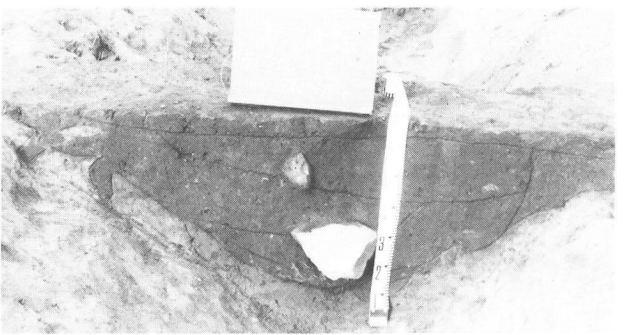


30. 南の堀IVベルト



31. 南の堀IIIベルト

28. 南の堀I—Vベルト設定状態



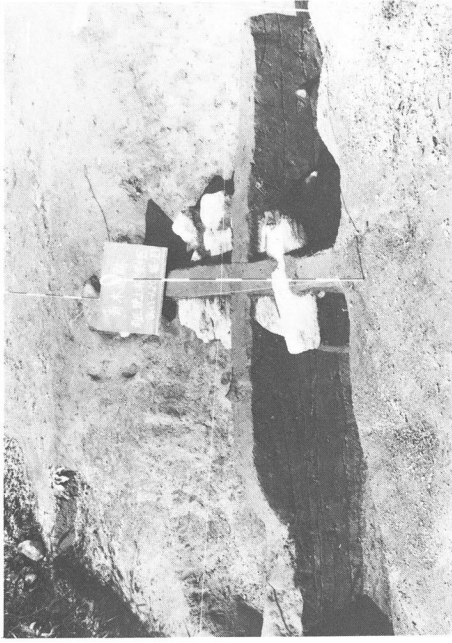
32. 南の堀IIベルト



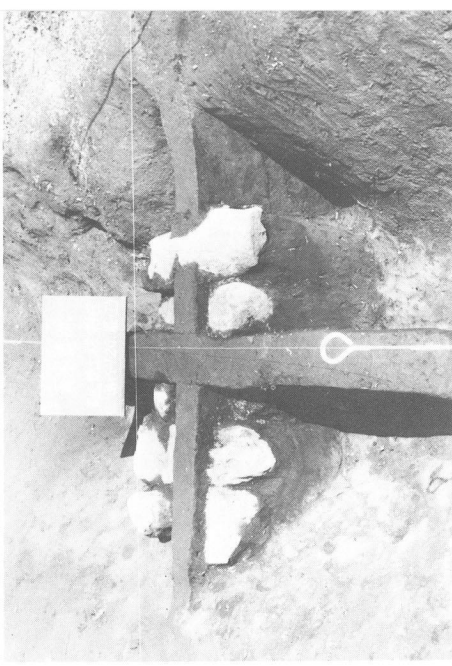
33. 南の堀Iベルト



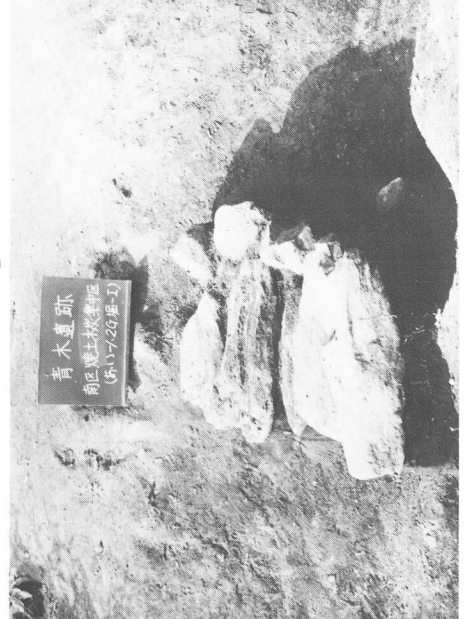
34. 敷石火葬墓 (焼土・木炭集中区改め)



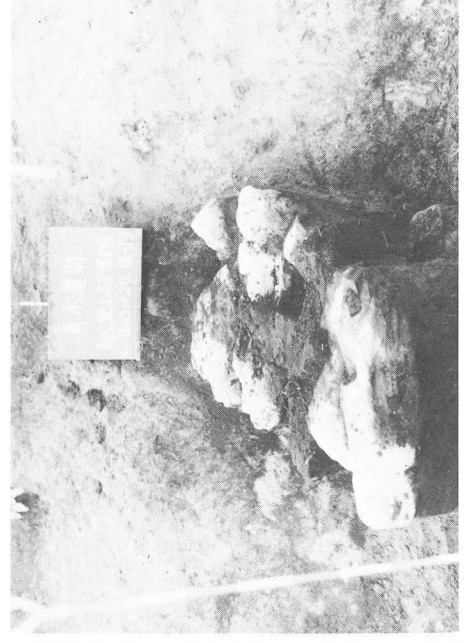
35. 同左 W-Eセクション



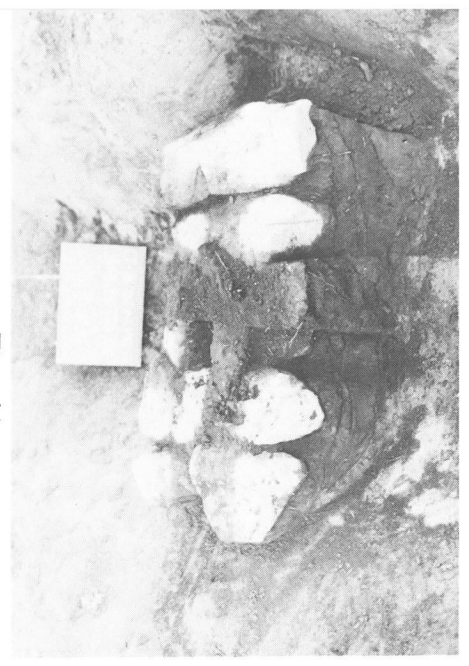
36. 同左 S-Nセクション



37. 同上 清掃終了状態



38. 同左 焼土・骨片検出状態



39. 同左

発掘調査報告第17集

駒ヶ根市火山地区個人土地整備事業

埋蔵文化財緊急発掘調査

青木遺跡

—— 第2次緊急発掘調査報告書 ——

1984

長野県教育委員会

駒ヶ根市教育委員会

凡 例

1. 今回の調査は、昭和58年度に実施された個人負担による土地整備事業に先立つもので、昭和58年8月18日から9月19日にかけて調査したものである。
2. 発掘調査は、長野県教育委員会と密な連絡をとる中で、個人負担による土地整備は、全額国県補助事業対象となるとの御指導をいただき、国県補助金を得て、駒ヶ根市教育委員会が中心となり、駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会を組織して行った。
3. 本報告書は、調査によって明らかとなった遺構及び遺物をより多く図示することに重点をおき、文章記述は簡便にした。
4. 遺物整理作業の中で、土器洗いを小町谷春子が、注記を宮下節子が担当した。土器の復元を小松原義人が担当し、遺物の実測を小原晃一が、図面製図及びトレースを宮下・小原が担当した。拓影、写真撮影は、小原が担当した。
5. 本報告書の執筆は、小原が行った。
6. 本遺跡の出土品及び諸記録・図面は、市立駒ヶ根博物館が保管している。
7. 挿図中・写真の遺物No.は通しであり、本文中の番号と一致する。
8. 遺構・遺物関係の図面の縮尺は、その都度明示してある。
9. 遺物・石質については、下記のとおりです。

- | | | |
|----------------|---------------|---------|
| ① 縄文土器(早・中期含む) | ☒ 敲打器 | ● 染付陶器 |
| ⊖ 打製石器 | ☐ 石英塊(火打石) | * 鉄製品 |
| ▲ 磨製石器 | ▲ 天目 | ▲ と石 |
| ■ 土師器(内黒) | ☒ 常滑 | ⊕ 古銭 |
| □ 土師器 | ⊗ 内耳 | ● 黒耀石剥片 |
| ▣ 須恵器 | ◎ 磨り石 | |
| ○ 灰釉 | ● 施釉陶器(中世・近世) | |

10. 遺構等の断面層位は、下記のとおりである。

- | | | |
|------------------------|----------------|--------|
| I層—表土(明褐色土) | V層—褐色土+ローム | IX層—焼土 |
| II層—耕土(暗褐色土) | IV層—黒色土 | |
| II'層—耕土(攪乱・うね) | VI層— " +ローム | |
| III層—黒褐色土(木炭粒・ロームブロック) | VII層—褐色土+砂利 | |
| III層— " (III+ロームふらん土) | VII'層— " +小礫 | |
| IV層—暗茶褐色土(木炭粒・ロームブロック) | VIII層—ローム層(砂質) | |
| IV層— " (" +ロームふらん土) | VIII層—ロームブロック | |
| V層—褐色土 | VIII'層—ロームふらん土 | |

目 次

凡 例 目 次

第 I 章 発掘調査の経緯	5
第 1 節 発掘調査に至るまでの経過	5
第 2 節 調査会の組織	5
第 3 節 発掘作業経過(発掘作業日誌)	7
第 II 章 遺跡の環境	9
第 1 節 位置及び地形	9
第 2 節 歴史的環境	10
第 III 章 発掘調査	13
第 1 節 調査概要	13
第 2 節 遺構と遺物	14
第 IV 章 考 察	25
第 1 節 出土遺物	25
第 2 節 遺 構	29
第 3 節 遺跡名「青木」に関すること	32
第 V 章 ま と め	33

挿 図 目 次

第 1 図 青木遺跡位置図	11
第 2 図 青木遺跡及び周辺遺跡分布図	12
第 3 図 青木遺跡第 2 次調査区遺構全測図	13
第 4 図 第 1 号住居跡覆土礫出土状態	15
第 5 図 第 1 号住居跡及び第 1 号集石址実測図並びに遺物分布図	15
第 6 図 第 1 号住居跡出土遺物実測図	16
第 7 図 第 1 号住居跡及び周辺出土遺物実測図	14
第 8 図 北の堀実測図及び出土遺物分布図	別添袋入
第 9 図 北の堀及び周辺出土遺物実測図	17
第 10 図 南の堀実測図	19・20

第11図	第1号土壙実測図	18
第12図	第2次調査区遺構外実測図及び遺物分布図	別添袋入
第13図	北の堀及び南の堀周辺出土遺物実測図	21
第14図	十二ノ后遺跡における奈良・平安時代の土器編年	26
第15図	白瓷編年図	30
第16図	須恵器・瓷器窯分布図	31

写真目次

写真1	第2次調査区全景，遺構全景，グリッド掘り下げ状態	
写真2	第1号住居跡，同セクション，遺物出土状態，出土土師器(内黒)	
写真3	第1号住居跡及び周辺出土遺物	
写真4	北の堀Ⅰ～Ⅴベルト設定状態，同ベルトセクション，掘り下げ完了状態	
写真5	北の堀及び第1号住居跡近景，北の堀出土遺物	
写真6	南の堀Ⅰ～Ⅳベルト設定状態，Ⅰ～Ⅳベルトセクション，礫出土状態，完了状態	
写真7	第1号集石址，同セクション，第1号土瓷，同セクション	
写真8	調査区北東の馬頭観世音，駒ヶ根郷土史講座見学風景	
出土遺物一覧表		22

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査に至るまでの経過

駒ヶ根市東伊那火山に位置する青木遺跡の一部が、火山果樹生産組合で進める生産組織施設整備事業の果樹棚灌水施設工事により破壊されるとのことで、市農林課、伊南農協東伊那事業所、火山果樹生産組合と連絡をとり合った。詳細な事業内容を把握の為に、伊那農協東伊那事業所の吉沢課長をたずね、昭和58年11月から果樹棚の造成ができるように調査を進めてほしいとの旨をお聞きする。長野県教育委員会文化課郷道主事と連絡をとり、当個人負担の土地整備に国県補助を受けられないものかどうかおたずねし、国県補助事業の対象となる旨を受けた。

昭和57年9月7日に、長野県教育委員会臼田主事、市教育委員会北沢、増沢、小原出席のもとで、事前現地協議をした結果、記録保存を行うということになった。調査面積、調査費用については、再検討し県教委へ報告するという協議内容であった。現地視察、表面採集を行う中で、火山果樹生産組合、市農林課と協議をし、桑の病気が果樹に要影響(モンパ菌)を与えないように、排土や作業に万全を期して欲しい旨をお聞きする。昭和58年度には全体で8haのわい果団地が造成される中で、青木遺跡の遺跡範囲の端に近いことと、自然傾斜に手加えられている現状から調査面積500mで、調査費用200万円見積りを立てた。

調査費用の内訳は、全額国県補助対象となり、国庫補助分100万、県費補助分30万、市負担分70万である。

事務手続きは、昭和58年5月2日付国庫補助金交付申請、同年7月1日付発掘調査届、同年9月19日付県費補助金交付申請を行う中で、7月1日に市長と駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会長との間で、「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を取りかわした。

調査は、駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会が行うこととし、第2次青木遺跡発掘調査団を編成し、団長には友野良一氏をお願いして、昭和58年8月18日から調査に入った。

第 2 節 調査会の組織(駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会)

顧問 鈴木 義 昭 (駒ヶ根市教育委員長)
会長 木 下 衛 (市教育長)
理事 小 池 金 義 (市教育次長)〈会長職務代理〉
" 友 野 良 一 (駒ヶ根市文化財審議会会長)

" 松 村 義 也 (" 副会長)
 " 宮 脇 昌 三 (" 委員)
 " 林 趙 (")
 理 事 竹 村 進 (駒ヶ根市文化財審議会委員)
 " 下 村 幸 雄 (市立駒ヶ根博物館長)
 監 事 中 原 正 純 (市文化財保存会会長)
 " 北 原 名田造 (駒ヶ根郷土研究会会長)
 幹 事 北 沢 吉 三 (市教育委員会社会教育係長)
 " 小 林 晃 一 (" 主査)
 " 北 原 和 男 (市立駒ヶ根博物館)
 " 野々村 はるゑ (")
 " 斉 藤 香 代 (")
 " 小 原 晃 一 (")

• 第2次青木遺跡発掘調査団 (事務所 駒ヶ根市上穂南2番15号 市立駒ヶ根博物館内)

団 長 友 野 良 一 (日本考古学協会会員)<発掘担当者>
 調査員 小 原 晃 一 (長野県考古学会会員)< " >
 " 小町谷 元 (上伊那考古学会会員)
 " 小松原 義 人 (長野県考古学会会員)
 " 田 中 清 文 (")
 指導者 関 孝 一 (長野県教育委員会指導主事 至58.3.31)
 白 田 武 正 (" ")
 小 林 孚 (" 自58.4.1)
 伝 田 和 良 (" ")
 郷 道 哲 章 (")
 樋 口 昇 一 (長野県史刊行会専門主事)
 宮 下 健 司 (")
 林 茂 樹 (日本考古学協会会員)

第3節 発掘作業経過

・発掘作業日誌

- 8月9日(火) 入口産業(株)のバックホーを借りて、調査区内の桑株を抜根する。
- 8月10日(水) 昨日の抜根の痕を、ブルドーザーで浮き土の排土作業をしてもらう。10cm×10mの主グイを、南西隅を基点として、北へ向って6・11・16、東へ向ってな・は・まと打つ。さらに、主グイ内に5m×5mのグリッドを設定する。
- 8月18日(木) つ～のー1～16G掘り下げ、は～ほー1～16G残土排土。つ～なー1に堀状の落ち込み検出。11ーは～13ーまにかけて堀状の落ち込み検出。陶器片出土。
- 8月19日(金) て～とー1～8G掘り下げ。な～にー11～16G掘り下げ。たー16～な・にー16にかけて住居跡状の落ち込み確認。天目、土師器片出土。
- 8月20日(土) て～とー8～16G掘り下げ。(暗褐色土層)ち・つー1～8G掘り下げ。出土遺物平板測量、レベル実測、写真撮影。
- 8月21日(日)・22(月) 雨天の為、現場作業休み。
- 8月23日(火) 6～10ーたG、11ーち・つG、11～15ーつ・てG、16ーなG掘り下げ。11～16ーぬ～はG内出土遺物平板測量、レベル実測。天目、瀬戸出土。
- 8月24日(水) 11～15ーた・ちG、16・17ーつ～ぬG掘り下げ。16ーなGP周辺の住居跡状の落ち込みを、第1号住居跡とする。11～15ーふ～ほG内、北の堀上層浮土を仮清掃。ベルト設定(I～V)南側たー3～ぬー1へかけての堀を、南の堀とする。打製石斧出土。
- 8月25日(木) たー12～15G掘り下げ。石垣が露出する。つ～にー16G、12～14ーぬ～まG掘り下げ。礫多し。内黒土師器片と熙寧元宝出土。0ーつ～ぬG内出土遺物平板測量、レベル実測。
- 8月26日(金) た～ぬー12・13堀(南の堀)掘り下げ。礫少し。た～とー3～6G内出土遺物平板測量、レベル実測。
- 8月27日(土) た～なー9～12G内出土遺物、石垣実測、レベル実測。11・12ーた～とG内堀掘り下げ。第1号住掘り下げ。土師・灰釉出土。
- 8月28日(日) 第1号住仮清掃。6ーた～の、11ーた～の、1～11ーつ、1～11ーぬベルト写真撮影、セクション実測。調査区全景写真撮影。はー1～11、ぬー1～11、な～のー8、な～のー3・6ベルトはずし。
- 8月29日(月) 赤穂公民館主催郷土史講座20数名見学。た～のー1・13WEベルト、ぬー11～17ベルト写真撮影、セクション実測。北の堀ーII・III区写真撮影。南の堀ー掘り下げ。3・6・8・11・13ーた～つベルトはずし。

- 8月30日(火) 16-た~の, 11~17-なベルトはずし。写真撮影, セクション実測。南の堀, I~V区掘り下げ。第1号住WE・SNベルト清掃, 写真撮影, セクション実測。
- 8月31日(水) 第1号住出土遺物写真撮影, 平板測量, レベル実測。南の堀, 掘り下げ完了, 仮清掃。北の堀-II・IIIベルトはずし。第1号住北寄り覆土にはさらに堀が遺存。
- 9月1日(木) 雨天の為, 現場作業休み。
- 9月2日(金) 第1号住ベルトはずし。13-5・つベルトはずし。16-ぬ~のG掘り下げ。第1号住出土遺物写真撮影, 平板測量, レベル実測。床面は耕作時のうねにより削られている。
- 9月3日(土) 北の堀III~VSHベルト写真撮影, セクション実測, ベルトはずし。13~17-つSHベルト写真撮影, セクション実測, ベルトはずし。第1号住壁検出, 仮清掃, 写真撮影。第1号土壇, 第1号集石址上端仮清掃, 写真撮影, ½カット。
- 9月4日(日) 南の堀I~IVベルト写真撮影, I・IIセクション実測。北の堀, ベルト清掃, 堀全体を仮清掃。
- 9月5日(月) 南の堀III・VIベルトセクション実測, I~IVベルトはずし。北の堀, 礫平板測量, 写真撮影。第1号土壇, 第1号集石址セクション写真撮影, セクション実測, ½残土掘り上げ。第1号住出土遺物平板測量, レベル実測。床面, 壁仮清掃。
- 9月6日(火) 第1号住, 柱穴掘り下げ, 仮清掃, 北の堀, 11-に~の出土礫平板測量, レベル実測。
- 9月7日(水) 県庁へ出張の為, 現場作業休み。
- 9月8日(木) 北の堀, 出土礫平板測量, レベル実測。に~の-11ベルトセクション実測。は~へ-11G内出土遺物平板測量, レベル実測。
- 9月9日(金) 北の堀, 11-ふ~ほG内出土礫検出。平板測量, レベル実測, 出土遺物測量。
- 9月10日(土) 北の堀, 11-ま・みG内出土礫検出。平板測量, 遺物実測, レベル実測。11-つ~ね南の堀の底, 壁清掃。11-ね・のG内出土礫とり上げ。
- 9月11日(日)・12日(月) 雨天の為, 現場作業休み。
- 9月13日(火) 南の堀I~VI出土礫, 堀平板測量, レベル実測。礫取り上げ清掃。北の堀V区内出土礫レベル実測, 礫取り上げ仮清掃。第1号住清掃, 写真撮影。第1号土壇, 第1号集石址写真撮影。
- 9月14日(水) 南の堀, 北の堀, 第1号住, 第1号集石址, 第1号土壇全面清掃。全域写真撮影。器材洗い, 整理, テント徹収。本日をもって調査を一応終了する。全面測量が残る。
- 9月15日(木) 雨の為, 作業休み。
- 9月16日(金) 全域, 地形・遺構測量を行う。器材整理(渋谷氏)
- 9月17日(土) 焼土集中区調査。セクション, 平面実測。S=1/10 発掘作業全て終了する。
- 9月18日(日) 現場休み。

9月19日(月) 小原・小町谷両名と上伊那貨物(株)のトラックで、器材を博物館へ運搬し、徹収する。

〔発掘参加者名簿〕

渋谷鉄雄・中村文夫・白川仁重・宮下三郎・小林正信・佐藤秋子・佐藤慶子・小林満寿子・赤羽笑子・下平昭恵・渋谷吉子・下平チカエ・北沢武志・川上敏明・久保田茂明・中村智幸

4週間余りにわたって、炎天下ときには雨天の中で、発掘調査に作業員として参加していただいた皆様方の多大な御協力と御理解のもとに、所期の目的を達成することができました。心から皆様方に感謝の意を申し上げる次第です。誠にありがとうございました。

(小原 晃 一)

第II章 遺跡の環境

第1節 位置及び地形(第1・2図)

当遺跡は、駒ヶ根市東伊那火山3431番地に所在する。国鉄飯田線太田切駅より北東へ4.5kmに位置し、標高は721m前後である。

駒ヶ根市は、三つの地区からなり、天竜川をはさんで、西側に赤穂地区、東側南部分に中沢地区、北部分に東伊那地区があり、その内の東伊那地区の北中央部に当遺跡は位置している。

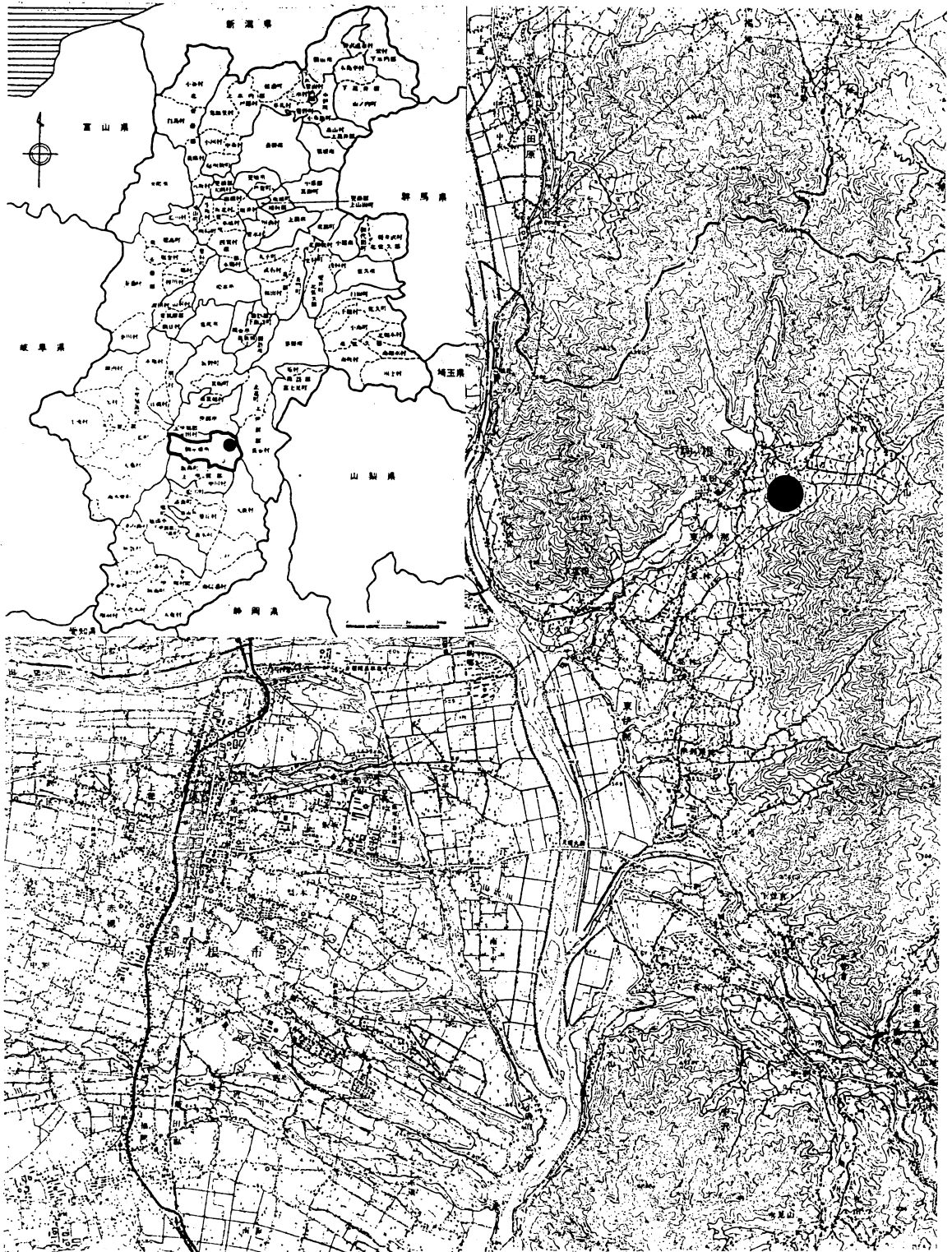
伊那谷は、諏訪湖より流れ出る天竜川とその支流である各々の田切川により開析され、西に木曾山脈(中央アルプス)があり、東に赤石山脈(南アルプス)、中央構造線をはさんで戸倉山、高鳥谷山を初めとする前山の伊那山脈が並行して走っている。この伊那山脈の一角をなす高鳥谷山及び火山峠に源を発する塩田川が造り出した扇状地の中央部のやや高い舌状台地上に立地し、塩田川との比高差は、最短距離地点で50mを測る。地質基盤は、礫層からなり、その上に新期ローム層(青木遺跡では砂質ローム)が堆積している。

当遺跡の層位は、凡例に示したとおりであるが、第2次調査の内、西側部分は割合ノーマルであるが、東側部分は開墾時の土層の移動等により、ローム面まで25cm前後と浅く、Ⅲ層以下の層位が安定していない。

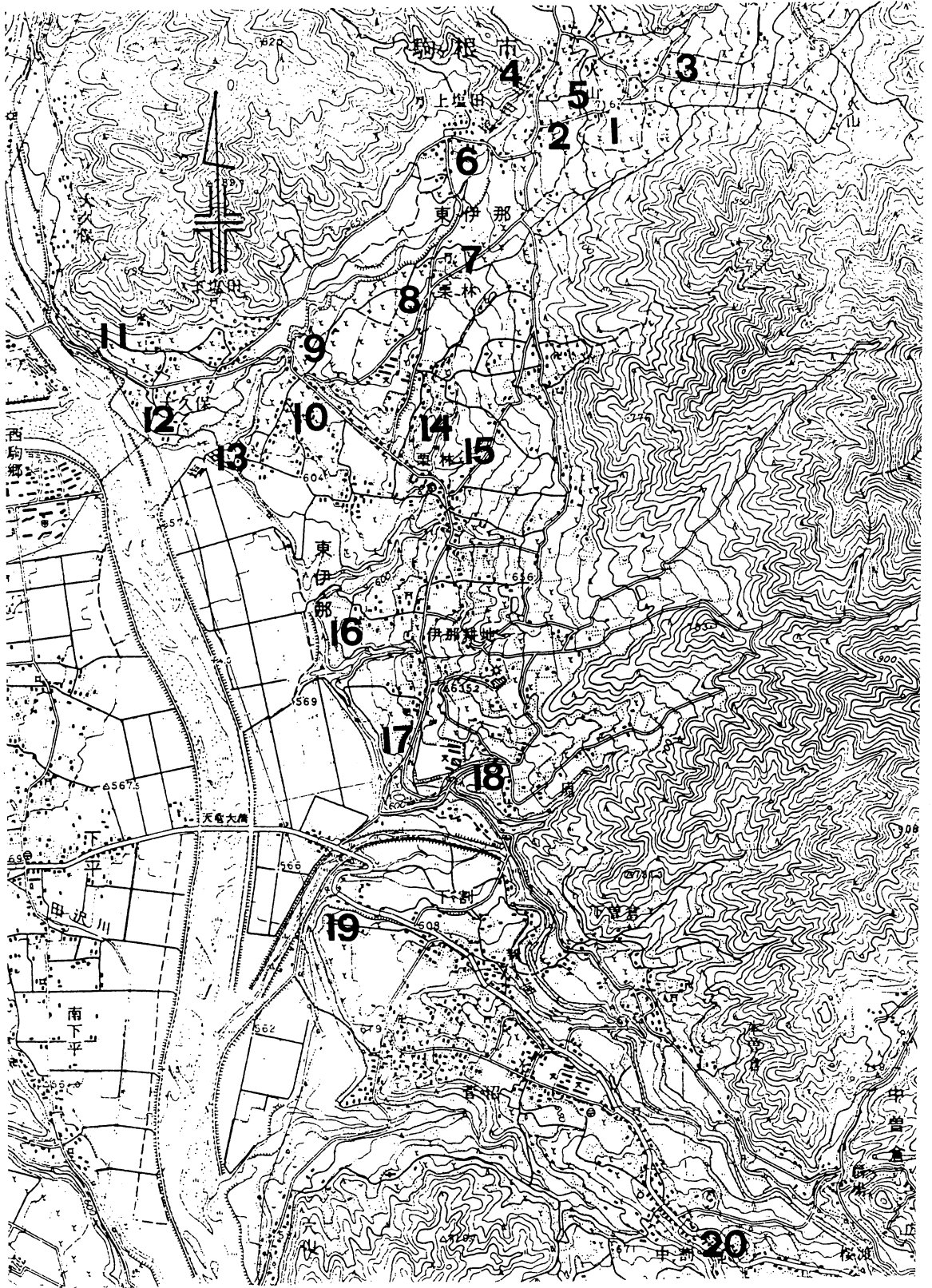
第2節 歴史的環境(第1・2図)

天竜川より東の地区(東伊那・中沢地区)は、遺跡の宝庫として知られ、大正末年発行の「先史及び原始時代の上伊那」(故鳥居龍藏博士著)に数多くの遺跡が確認されている。特に、天竜川左岸段丘上には、数多くの中世城址(歴史的文献及び調査は少ない)、扇中央部には弥生時代後期の遺跡、山麓部には縄文時代の集落跡が存在している。第2図中2は、青木城(中世、昭和59年度に発掘調査が予定されている)、3は高山社(青木城居館主、牛山道賢氏に関する棟札が保存されている)、4は塩田城(中世)、5は青木北(縄文・平安)、6は上塩田(縄文・平安・中世・昭和57年に発掘を行い、縄文前期の住居跡1軒、中期の土壌5期、後期の配石址1ヶ所、同期のピット群、平安時代の住居2軒が検出され、遺物は、縄文早期、前期、後期、晩期の土器、石器土師器、須恵器のほか、灰釉陶器、青磁器片が出土している)、7は栗林神社東(弥生後期、昭和57年に発掘を行い、弥生後期の住居10軒、同期の土壌2基、平安時代の住居跡2軒、時代不確定のピット群1ヶ所、同土壌1基、溝状遺構2ヶ所、近代の「農業用貯蔵施設」1ヶ所が検出されている。主な出土遺物は、弥生後期の大型壺形土器2点、甕、鉢、高坏等、石器、覆土からは、押型文土器片、早期土器片が出土している)、8は善込(弥生後期)、9は垣外上(弥生)、10は反目(縄文)、11は箱畳(平安、中世～近世)、12は大久保城(中世)、13は高田城(中世)、14は城村城(中世)、15は小城(中世)、16は稲村城(中世)、17は殿村(平安)、18は原城(中世)、19は古城(中世)、20は高見城(中世)である。

図示以外にも、中世の城址、縄文時代・弥生時代・平安時代の遺跡が、台地から山麓部一帯にかけて密集して存在している。



第1図 青木遺跡位置図 (S = $\frac{1}{50,000}$)



第2図 青木遺跡及び周辺遺跡位置図 (S = $\frac{1}{10,000}$)

第三章 発掘調査

第1節 調査概要(第3図, 写真1・2)

発掘調査に先立ち、第2次調査区周辺の桑畑の表面採集を行い、灰釉陶器片、打製石斧片、黒耀石剥片、染付を採集する。

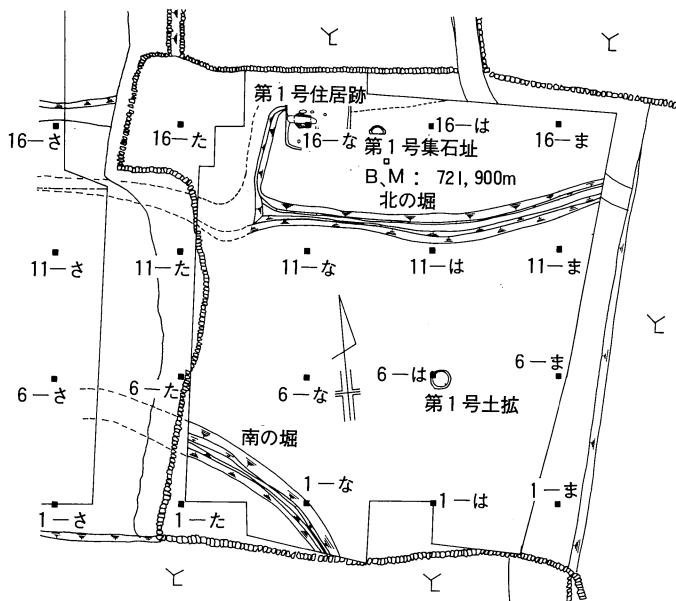
調査方法は、調査地区が桑畑の為、重機をお願いして、桑株抜根作業を行い、表土(I層)をブルドーザーにより排土した。調査区の南西隅を基点(た-1G・P)として、台地の傾斜方向に対して、ほぼ東西-南北軸に沿うように10m×10mのポイントを設定し、東へ向って、な-は-ま G・P, 北へ向って6-11-16G・Pを設け、さらに、その中へ、5m×5mのグリッドを設けた。グリッドは、南西隅から北へ向ってa~f, その東側が、g~l, さらにm~r, そしてs~wと名づけた。ベルトは5m×5mごとに幅30cmに設定し、断面を実測した。

出土遺物は、第II層以下を全てドットマップして平板測量を行い、レベルを実測し、写真撮影を行った。

調査面積は、およそ1,100㎡である。

検出された遺構は、第3図を参照されたいが、平安時代の住居跡1軒、中世の堀2本、同集石址1ヶ所、同土壙1基である。

出土した遺物は、縄文時代早期の土器片、中期の土器片、石器片をはじめ、土師器、須恵器、



第3図 青木遺跡第2次調査区遺構全測図 (S = $\frac{1}{600}$)

灰釉陶器，施釉陶器（天目，瀬戸・美濃，染付等），鉄製品，古銭が出土し，総点数は少なく，147点である。

第2節 遺構と遺物(第4～10)

第1号住居跡(第4～7図，写真3・4)

遺構 本跡は，調査区内北西隅より検出され，北の堀から，5mの地点にあり，さらに住居跡内北壁寄りにも堀りが入り込んでいる。プランは隅丸方形で，東西5m，南北4m80cmを測る。

壁は，東・南・北側で急な傾斜をもつが，西側は，浅くゆるやかで，東壁で45m，西壁で15cmを測る。

床面は，堅くたたきしめられているが，耕作時の桑のうねにより南北位に3ヶ所削りとられている。なお，南壁に沿って深さ3～5cmの周溝をもつ。

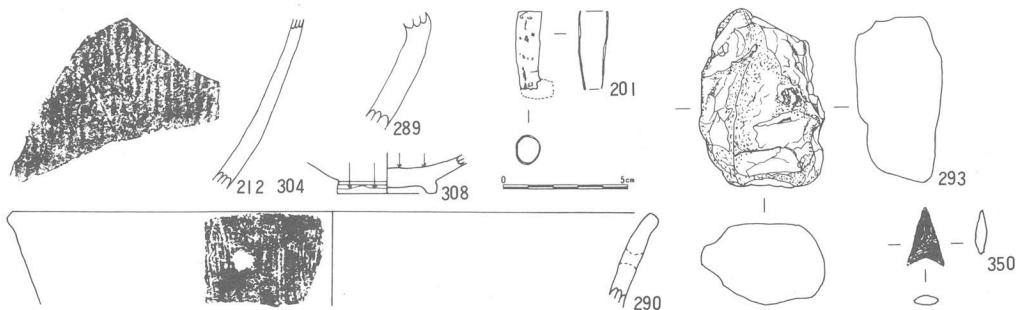
カマドは検出されず，西壁寄床面に東西2m，南北60cm，深さ15～17cmの溝状の掘り込みがあり，その周辺に焼土が3～5cm遺存していた。焼土遺存範囲には花崗岩・花崗閃緑岩があり，焼けていた。

柱穴は，P₁～P₇までが考えられ，深さは10cm～58cmと一定しないが，平均30cm前後である。

なお床面南西域には，木炭集中箇所が，東西60cm・南北50cmの楕円状に遺存し，花崗閃緑岩の盤状石が置かれ，さらに，東壁寄床面には，花崗岩の盤状石が置かれていた。

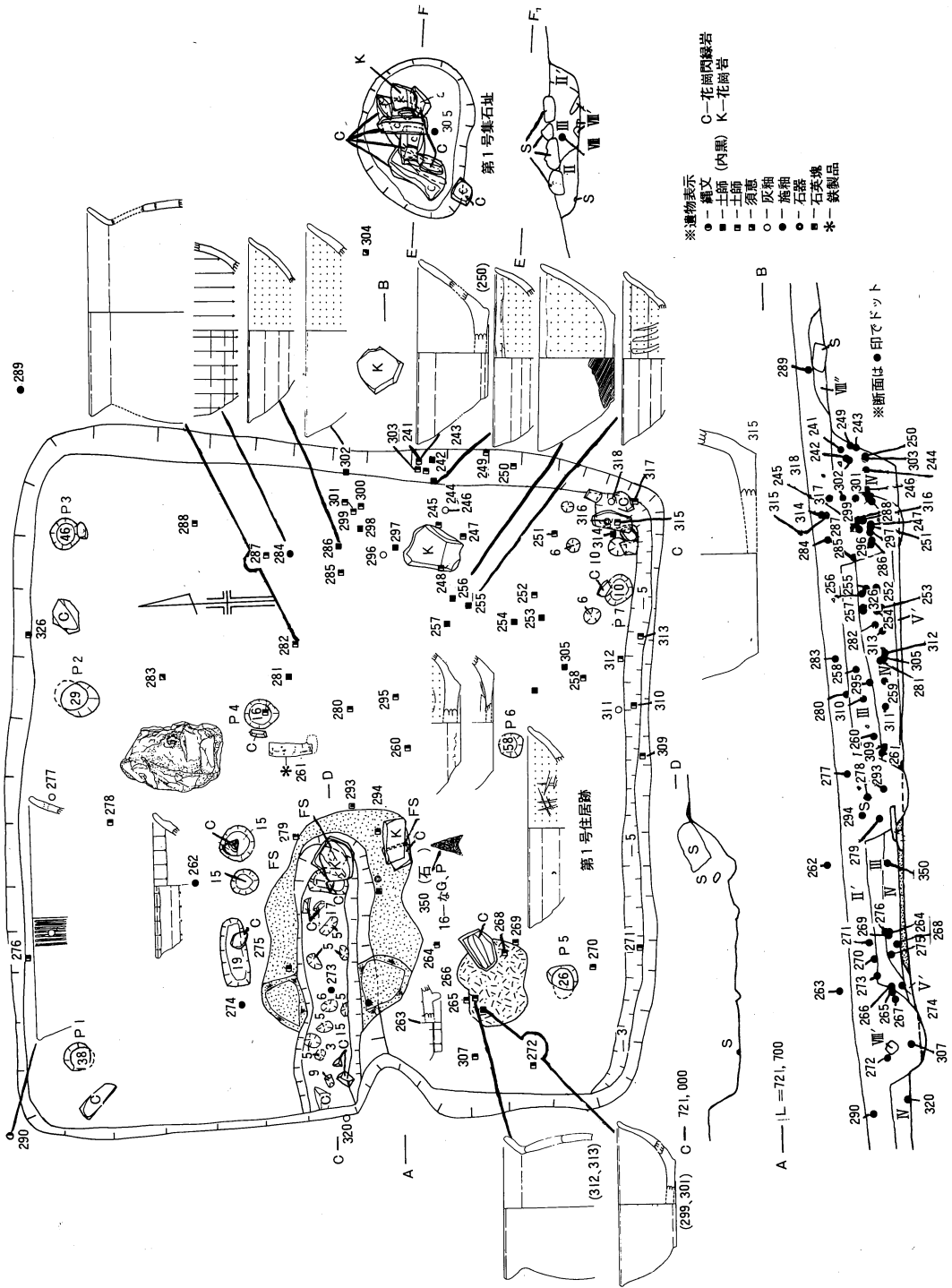
遺物 第5～7図を参照されたいが，住居跡床面10cm上位に集中し，床面直上の遺物は少なかった。住居跡内からは，土師器坏，甕，内黒土師器坏，灰釉碗，施釉陶器皿，碗，火打石，きせる雁首が出土し，焼土集中箇所より縄文時代の石鏃（黒耀石製）が出土している。

住居跡外からは，須恵器甕胴部分，陶器片，縄文時代早期深鉢形土器口縁部片（有孔），打製石斧片が出土している。なお，住居跡覆土には第4図の様に焼けた礫・自然礫が遺存していた。

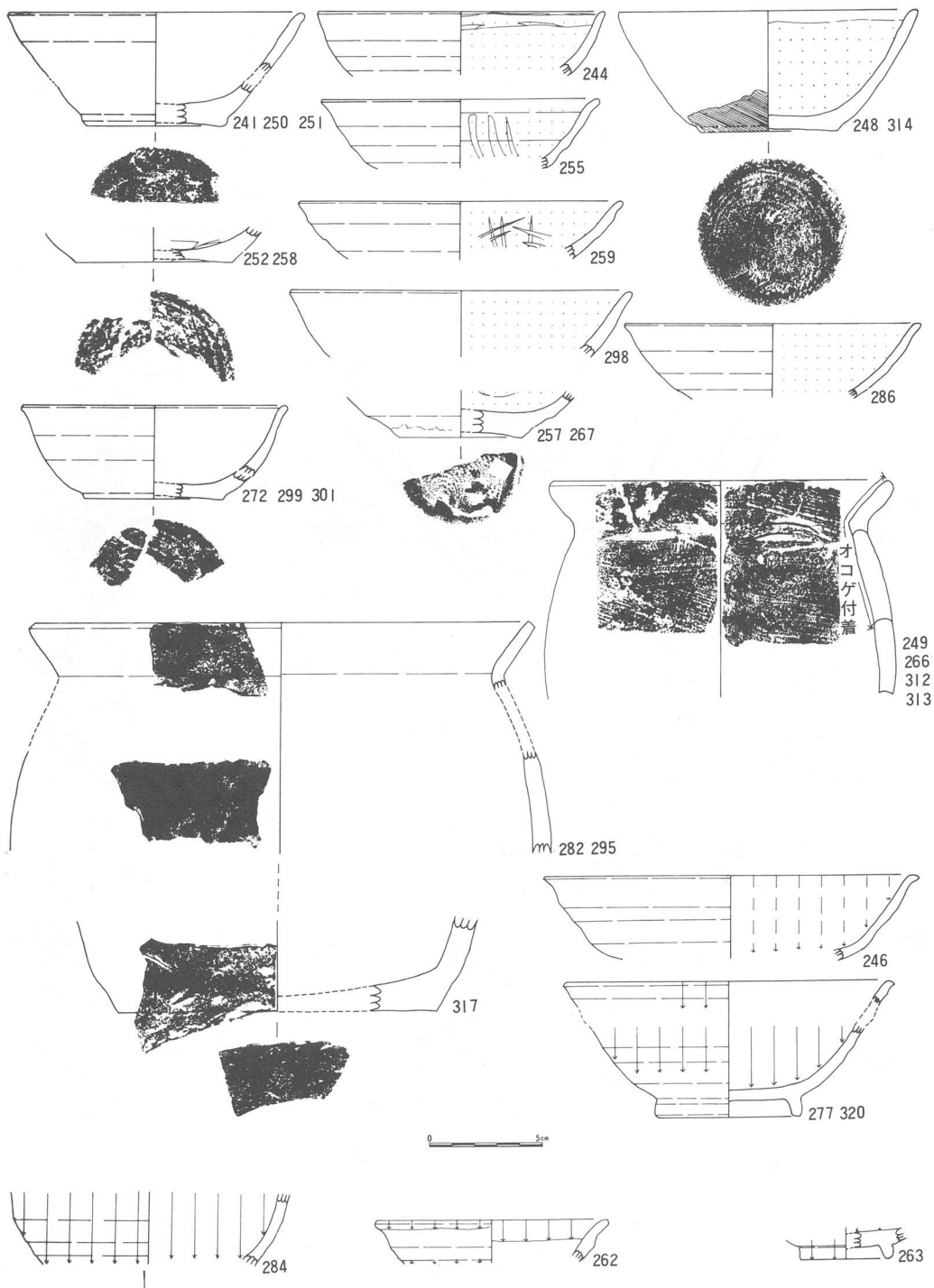


第7図 第1号住居跡及び周辺出土遺物実測図 (S = $\frac{1}{3}$)





第5図 第1号住居跡及び第1号集石址実測図並びに遺物分布図 (S = $\frac{1}{20}$)



第6図 第1号住居跡出土遺物実測図 (S = $\frac{1}{3}$)

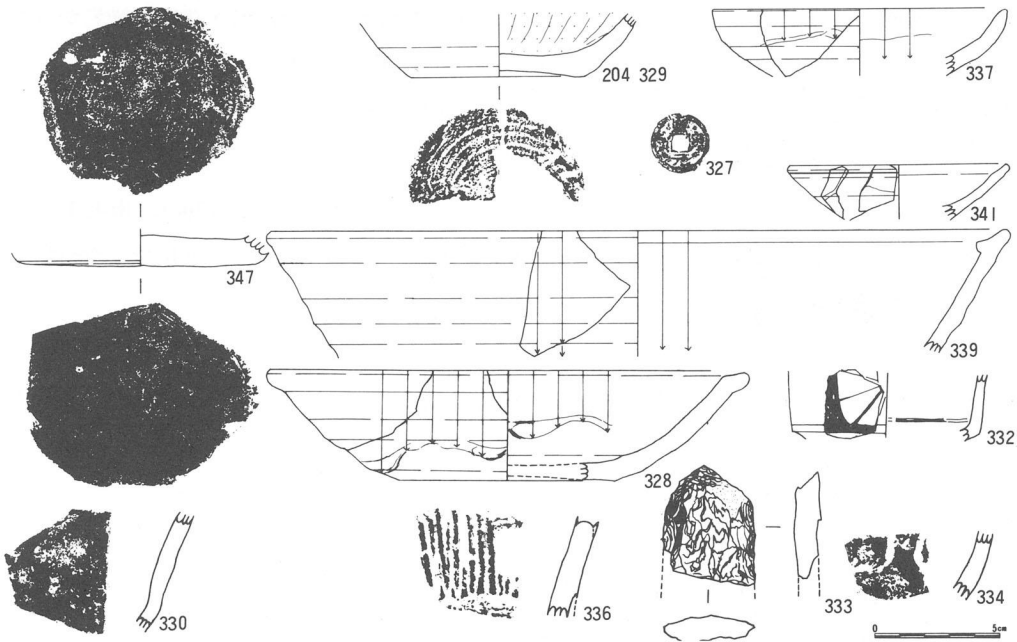
北の堀(第8・9図, 写真3・4)

遺構 本跡は, 調査区内11-まG・Pから, 11-たG・Pにかけて, やや曲りながら検出された。現況では, 長さ28m, 幅は, 最大2m10cm, 平均1m50cm~1m80cm, 最少1m30cmを測り, 深さは, 東からVベルトで60cm, IVベルトで60cm, IIIベルトで75cm, IIベルトで45cm, Iベルトで1m70~2mに及ぶ。IIIベルトから東側にかけて花崗岩・花崗閃緑岩が主体となる自然礫群が堆積しており, 最大のもは, 70cm×40cmで, 平均的にはこぶし大から人頭大のものであり, 人為的な礫(使用痕等のあるもの)は無かった。層位は第8図を参照されたい。

掘り込みは, 薬研状に掘り込まれているが, 顕著なのは, IベルトからIVベルトにかけてで, Vベルトより東方は, 基盤に自然石の露出が目立ち顕著ではない。

遺物 第9図を参照されたいが, 堀の中から出土した遺物は, 土師質土器底部片, 内黒土師器胴底部片, 陶器皿口縁部片, すり鉢口縁部片, 浅鉢片, 古銭(熙寧元宝, 宗)が出土している。

なお, 堀をはさんで周辺からは, 縄文時代早期, 中期土器片, 打製石斧片, 施釉陶器片が出土している。



第9図 北の堀及び周辺出土遺物実測図 (S = $\frac{1}{3}$)

南の堀(第10・13図, 写真7・8)

遺構 本跡は, 調査区内南西城から検出された。に—OGからつ—2Gにかけて, 北にややふくらんでいる。現況での長さは14m, 幅は最大で2m50cm, 最少で1m80cm, 平均的には2m前後である。深さは, 東側で45cmと浅く, IIベルトからIVベルトにかけて70~75cmと深くなっている。層位は, 第10図を参照されたい。

掘り込みは, 北の堀同様に薬研状に掘り込まれているが, IIIベルトからIベルト(東から西にかけて)は顕著であるが, IVベルト周辺は, 自然礫群が露出しており顕著ではない。

遺物 第13図を参照されたいが, 本跡内からNo.225の白磁(18C)片が1点出土したのであり, Iベルト北東方向に, 打製石斧片, 施釉陶器片, さらにIベルト北方向に正目等が出土している状態である。

第1号集石址(第5図, 写真7・8)

遺構 本跡は, 第1号住居から東へ1m70cmの地点から検出された。プランは, 東西1m15cm 南北85cmで, 楕円形をしている深さは, 東壁で20cm, 西壁で12cmであり, 壁はゆるやかに傾斜している。

層位は中央にIII層が, 周の周辺にII層が堆積し, 開口部覆土に, 花崗岩・花崗閃緑岩が合わせて9個集石していた。床面は, やや軟弱であり, 小石が遺存していた。

遺物 本跡から出土した遺物は, 施釉陶器碗(18C)胴部片のみである。

第1号土壇(第11図, 写真5・6)

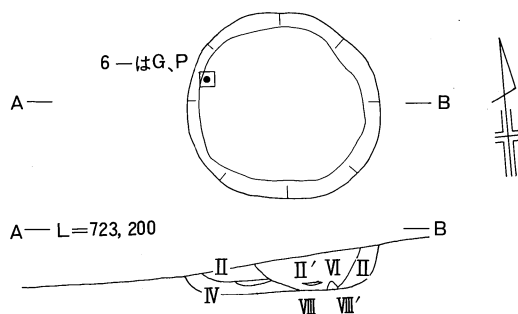
遺構 本跡は, 調査区内ほぼ中央部から検出された。プランは, 東西1m50cm, 南北1m50cmでほぼ円形をしている。深さは, 東壁で30cm, 西壁で15cmである。床面は, 平担で, やや軟弱である。壁は, ゆるやかな弧をえがいている。

層位は, 耕作時のうねにより中央付近が攪乱しており, そのほかは安定している。

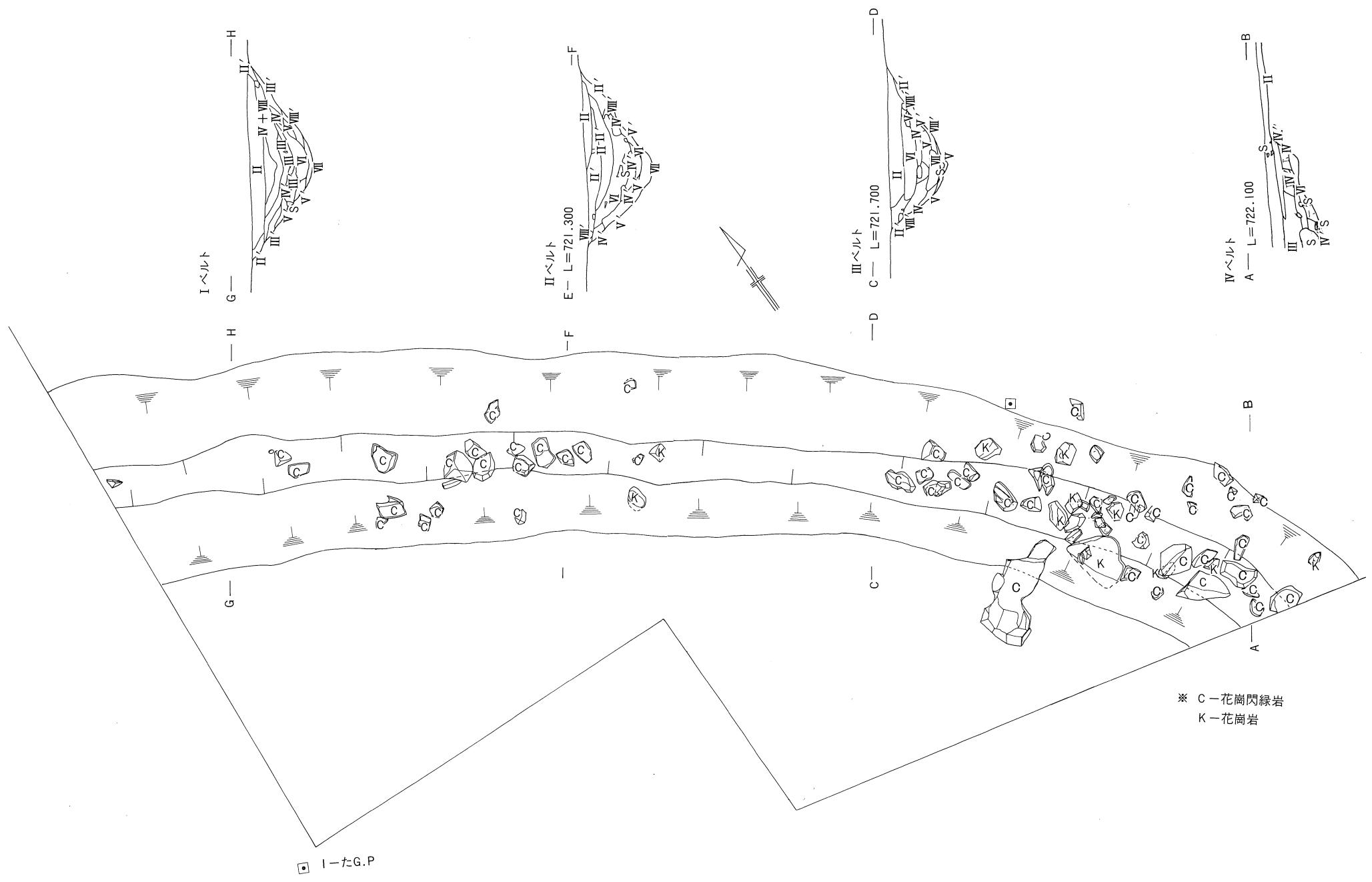
遺物 本跡から出土した遺物はないが, 南方向4m50cmの地点から天目茶碗片が1点出土している。

遺構外の出土遺物(第12・13図)

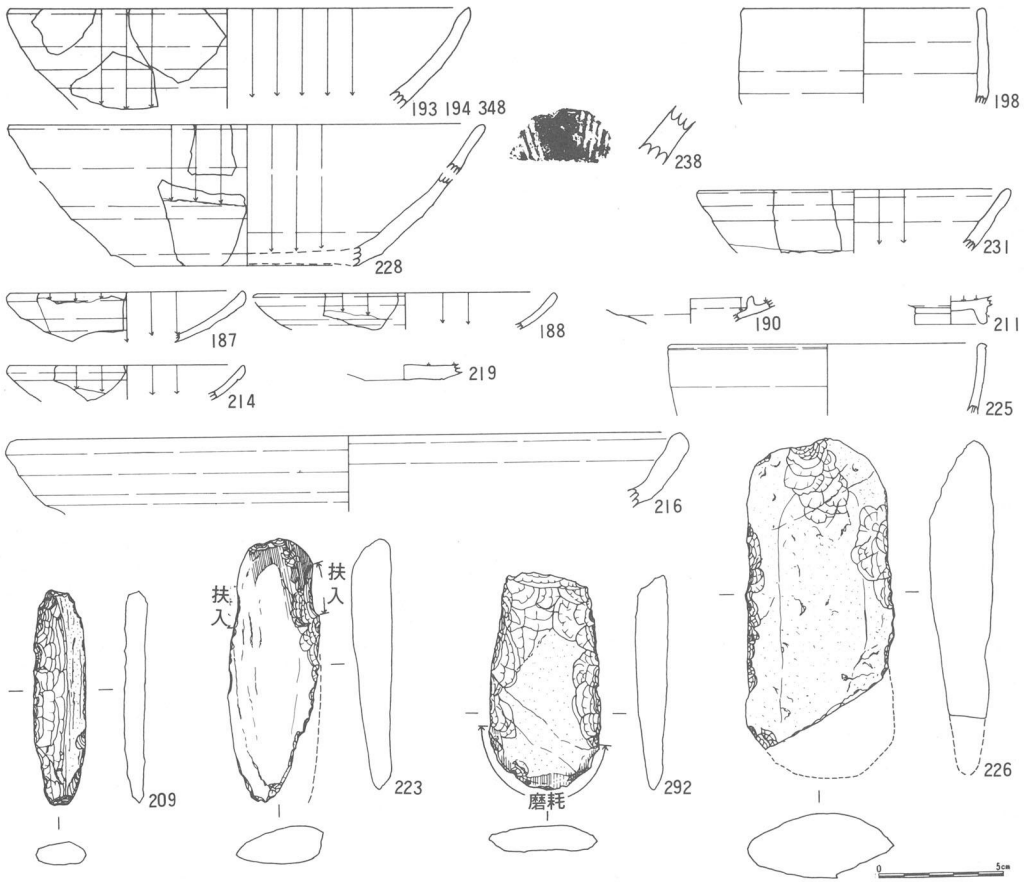
北の堀と南の堀の間から出土した遺物である。施釉陶器碗破片4点(同一個体あり), 施釉灯明皿口縁部片3点, 同胴部片1点, 施釉陶器底部片2点, 天目碗破片1点, すり鉢破片2点, 打製石器4点が図示及び復元実測できたもので, このほかにも, 施釉陶器片, 天目等が出土している。



第11図 第1号土壇実測図(S = $\frac{1}{60}$)



第10図 南の堀実測図 (S = $\frac{1}{60}$)



第13図 北の堀及び南の堀周辺出土遺物実測図 (S = $\frac{1}{3}$)

出土遺物一覽表

番号	挿 図	種 別											形 態	時代及 び時期	*計 測 値				特 徴	
		土器	石器	土 器	須 恵 器	灰釉	施釉	天目	常滑	青磁	内耳	染付			古銭	鉄製 品	高さ (長さ)	口径 (幅)		胴径 (厚さ)
197														碗, 口縁部	18C					
198	第13図						○						○	香炉, 口縁部	17C初		9.4			器壁厚4mm, 色調一黒褐色, 胎土一灰黄白色
199				○										甕胴部	11C					
200						○								皿, 口縁部	15C					
201				○										内黒土師器底部	11C					
202		○												深鉢形, 胴部	縄文前期					
203							○							茶わん, 胴部	15C前半					
204	第9図			○										内黒土師器, 底部	11C			6.8		糸切底, 色調一明灰褐色, 胎土一銀雲母, 石英, 長石
205				○										〃	〃					
206						○								灯明皿, 胴部	18C				6.8	
207			(○)											硬砂岩剥片	縄文					
208			(○)											〃	〃					
209			(○)											打製石斧短冊形	〃	8.5	2.0	0.9	24g	緑泥片岩, 剝離やや雑, 片面のみ自然面残る
210						○								茶わん, 胴部	18C					
211	第13図					○								茶わん, 底部	〃				2.9	付高台, ヘラ切り底, 色調一灰白色, 胎土一灰黄白色
212	第7図			○										甕, 胴部	〃					No304と同一個体, 平行叩き目
213						○								茶わん, 胴部	11C					
214	第13図					○								皿, 口縁部	18C		9.2			器壁厚2.5~3mm, 色調一茶褐色 胎土一暗灰色
215						○								茶わん, 胴部	〃					
216	第13図					○								すり鉢, 口縁部	〃		26.4			色調一こげ茶色, 胎土一淡黄白色
217						○								小壺, 胴部	〃					
218													○	茶わん, 口縁部	〃					
219	第13図					○								皿, 底部	〃				3	色調一灰白色, 胎土一灰黄白色, ヘラ切り底
220			(○)											硬砂岩剥片	縄文					
221			(○)											〃	〃					
222													○	茶わん, 胴部	18C					
223	第13図		○											縦型石匙	縄文	10.4	3.6	1.4	82g	緑泥片岩, 頭部磨ってある刃部欠く
224			(○)											硬砂岩剥片	〃					
225	第13図									○				碗, 口縁部	18C		12.4			器壁厚3.5mm, 白磁, 色調一淡灰色, 胎土一白色
226	〃		○											打製石斧, 短冊形	縄文	11.3	5.8		242g	刃部欠く, 硬砂岩, 片面のみ自然面残る
227						○								茶わん, 胴部	15C前半					器壁厚4~5mm, 釉一黒褐色, 胎土一灰白色
228	第13図					○								茶わん, 口縁部	15C		18.8			器壁厚4~6mm, 釉一淡緑色, 胎土一灰白色
229						○								茶わん, 胴部	15C前半					
230						○								皿, 胴部	15C					
231	第13図					○								茶わん, 口縁部	〃		12.2			色調一淡緑色, 胎土一淡青色
232						○								碗, 口縁部	18C					
233						○								茶わん, 口縁部	〃					
234						○								皿, 胴部	〃					
235						○								碗, 口縁部	〃					
236													○	茶わん, 胴部	〃					
237													○	茶わん底部	〃					
238	第13図					○								すり鉢胴部	15C					色調一暗黒褐色, 胎土一灰白色
239														茶わん, 胴部	18C					
240						○								〃	〃					
241	第6図			○										坏, 口縁部	11C		12.6			
242				○										坏, 胴部	〃					
243				○										内黒土師器, 胴部	〃					
244	第6図			○										内黒土師器口縁部	〃		12.4			色調一明褐色, 胎土一銀雲母, 長石, 口唇部一ヘラナデ
245				○										甕, 胴部	〃					

番号	挿図	種別											形態	時代及び時期	計測値				特徴		
		土器	石器	土師器	須恵器	灰釉	施釉	天目	常滑	青磁	内耳	染付			古銭	鉄製品	高さ(長さ)	口径(幅)		径(厚さ)	底径(重さ)
246	第6図					○									茶わん, 口縁部	11C					
247				○											環, 胴部	〃					
248				○											環, 口縁部	〃	5.3	13		6.0	縁口縁, 糸切底, 色調一明茶褐色, 胎土一銀雲母多し
249	第6図			○											甕, 口縁部	〃		14.8	15.6		内面オコゲ付着, 頸部径13cm, 胎土一銀雲母多し, ハケナデ
250	〃			○											環, 口縁部	〃		12.6	15.6		No241と同一個体
251	〃			○											環, 底部	〃				6	糸切底, 色調一明茶褐色, 胎土一銀雲母, 長石, 石英
252	〃			○											〃	〃				7.0	糸切底, 色調一明茶褐色, 胎土一銀雲母, 長石・石英
253				○											内黒土師器口縁部	〃					
254				○											〃 胴部	〃					
255	第6図			○											〃 口縁部	〃		12			色調一明褐色, 胎土一銀雲母多し, 内面雑な暗文
256				○											〃 〃	〃					
257	第6図			○											〃 底部	〃				5.4	No267と同一個体
258	〃			○											環, 底部	〃				7.0	No252と同一個体
259	〃			○											内黒土師器口縁部	〃		14			色調一暗褐色, 胎土一金雲母, 長石, 内面雑な暗文
260				○											甕, 胴部	〃					No245と同一個体
261	第7図											○		きせる雁首	中世~近世	2.6	0.5				最大径1.1cm小径7mm
262	第6図					○								燈明皿	18C		10				色調一圧褐色, 胎土一灰色
263	〃					○								茶わん底部付高台	〃				4		付高台, 色調一淡灰緑色, 胎土一灰白色
264				○										環, 胴部	11C						
265				○										甕, 口縁部	〃						
266	第6図			○										甕, 胴部	〃		14.8	15.6			内面オコゲ, No276と同一個体
267	〃			○										内黒土師器胴部	〃				5.4		糸切底, 色調一明褐色, 胎土一銀雲母, 長石, 石英
268				○										甕口縁部	〃						
269				○										器, 胴部	〃						
270				○										甕, 胴部	〃						
271				○										〃	〃						
272	第6図			○										環, 口縁部	〃	4.1	11.4		6.2		糸切底, 色調一明褐色, 胎土一金雲母, 長石, 石英
273						○								茶わん, 胴部	18C						
274						○								〃	〃						No212と同一個体
275				○										甕, 胴部	11C						平行叩き目
276				○										〃	〃						内面オコゲ
277	第6図					○								茶わん, 胴部	10C, 初	6.0	14		6.2		色調一灰緑色, 胎土一灰白色
278				○										甕, 胴部	11C						
279				○										〃	〃						
280				○										甕, 口縁部	〃						No245と同一個体
281				○										内黒土師器底部	〃						
282	第6図			○										甕, 胴部	〃		21.6				No245と同一個体
283				○										環, 底部	〃						
284	第6図					○								茶わん, 胴部	近世初						器壁厚5mm内外, 釉一黒色, 胎土一灰黄白色
285				○										甕, 胴部	11C						
286	第6図			○										内黒土師器口縁部	〃		12.8				色調一明褐色, 胎土一長石, 石英, 内外ナデ
287				○										甕, 胴部	〃						
288				○										〃	〃						
289	第7図					○								〃	15C						色調一淡灰緑色, 胎土一灰白色 外面一ヘラ条あり
290	〃	○												深鉢形口縁部	縄文早期末		25.4				有孔, 色調一灰褐色, 胎土一長石多し, 条痕文
291		○												深鉢形胴部	〃						No202と同一個体
292	第13図		○											打製石斧短冊形	〃	8.6	4.4	1	63g		刃部は使用により磨耗している
293	第7図		○											火打石, 石英塊	中世~近世	7.1	4.9	3.2	167g		石の角を敲打している
294				○										甕, 胴部	11C						
295	第6図			○										甕, 口縁部	〃		21.6				色調一明褐色, 胎土一金雲母, 長石多し, 内外ナデ
296						○								環, 口縁部	〃						

番号	挿 図	種 別										形 態	時代及 び時期	計 測 値				特 徴		
		土器	石器	土師器	須恵器	灰釉	施釉	天目	常滑	青磁	内耳			染付	古銭	鉄製品	高さ (長さ)		口径 (幅)	胴径 (厚さ)
297				○										内黒土師底部	11C					
298	第6図			○										口縁部	"		14.8			色調一暗褐色、胎土一銀雲母、長石
299	"			○										底部	"				6.2	糸切り底
300				○										甕、口縁部	"					
301	第6図			○										環、底部	"				6.2	No299と同一個体
302				○										内黒土師器胴部	"					
303				○										甕、胴部	"					
304	第7図			○										"						
305				○										内黒土師器胴部	11C					
306			(○)											輝緑岩						
307				○										甕、胴部	11C					
308	第7図					○								茶わん、底部	18C					付高台、色調一茶褐色、胎土一灰白色、ヘラ切底
309				○										環、胴部	11C					
310				○										甕、胴部	"					
311	—													—	—					
312	第6図			○										甕、胴部	11C		14.8	15.6		No249と同一個体、頸部径13cm
313	"			○										"	"					No249と同一個体
314	"			○										内黒土師器底部	"	(5.3)	13		6.0	No248と同一個体
315				○										環、口縁部	"					
316			○											剥片石器	縄文					
317	第6図			○										甕、底部	11C				14	No295と同一個体
318						○								茶わん、口縁部	10C初		16.0			1/4個体、色調一淡灰緑色、胎土一泥灰色
319			○											剥片石器	縄文					
320						○								茶わん、底部	10C初				6.2	No277と同一個体
326				○										甕、胴部	11C					
327	第9図											○		照寧元宝	中世					腐蝕ややあり
328	"					○								浅鉢	15C	4.4	19		8.5	1/6個体、二重口縁、色調一淡緑色、胎土一灰黄白色
329	"			○										内黒土師器底部	11C				6.8	
330	"	○												深鉢形胴部	縄文早期末					内外指頭圧痕あり、色調一明褐色、胎土一粗い長石
331											○			内耳、胴部	15C~16C					
332	第9図					○								織部、碗	18C				8	器壁厚4~6mm、色調一黄白色の地に黒須で文様付ける
333	"		○											打製石斧	縄文	4.7	3.6	1.0	26g	部のみ緑泥片岩
334	"	○												深鉢形、胴部	縄文中期前半					色調一暗褐色、胎土一粗い長石沈線の横凹文
335				○										内黒土師器口縁部	1C					
336	第9図	○												深鉢形、胴部	縄文中期前半					竹管による平行沈線文、色調一明褐色、胎土一粗い長石
337	"					○								皿、口縁部	18C		11.6			器壁厚6mm、色調一淡緑色、胎土一灰白色
338		○												深鉢形、胴部	縄文中期					
339	第9図					○								すり鉢、口縁部	15C		29.2			色調一緑褐色、胎土一灰黄白色二重口縁
340						○								茶わん、胴部	15C前半					
341						○								灯明皿、口縁部	18C		8.6			器壁厚4mm、色調一茶色、胎土一灰黄白色
342						○								皿、胴部	"					
343				○										甕、胴部	11C					
346				○										環、胴部	"					
347				○										甕、底部	"				9.2	底部内外ヘラナデ、色調一明褐色、胎土一銀雲母多し
348	第13図					○								茶わん、胴部	15C					釉一淡緑色、胎土一灰黄白色、器壁厚6mm内外
349						○								"	15C前半					
350	第7図		○											石鉄	縄文	2.1	1.4	0.4	1g	黒輝石裂、全面丁寧な刺雑
187	第13図					○								灯明皿、口縁部	18C		9.2			器壁厚2~4mm、色調一白色、胎土一灰黄白色
188	"					○								"	"		11.8			器壁厚3mm、色調一茶鉛色、胎土一灰黄白色
189			(○)											黒曜石剥片	縄文					
190	第13図					○								灯明皿	18C		(5.0)			

第Ⅳ章 考 察

第1節 出土遺物

1. 土師器

当遺跡からは、坏・甕が出土している。主として、図化したものを考察する。

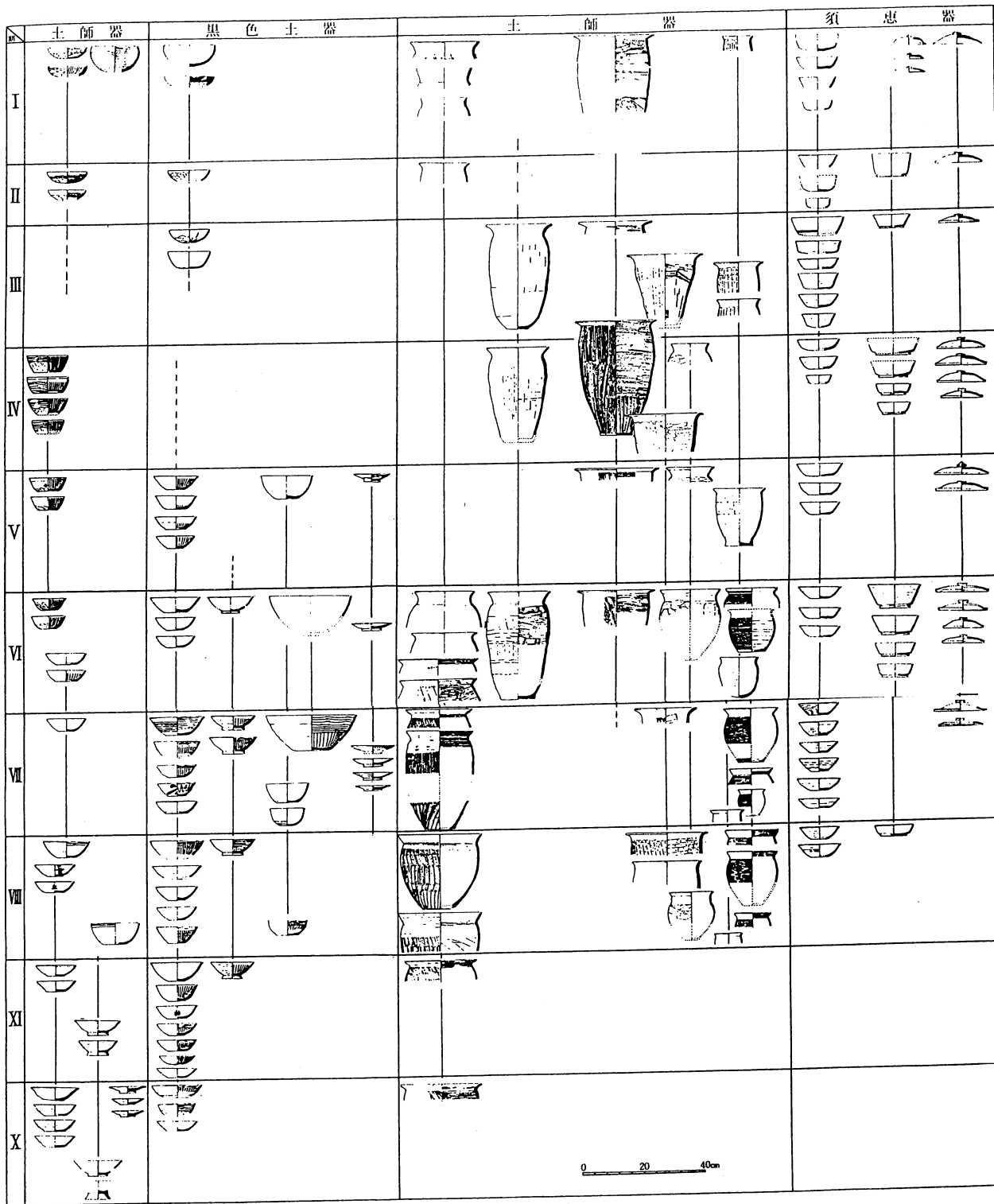
No241・250は、坏の同一個体で、4分の1個体の大きさである。色調は、明茶褐色で、胎土には、銀雲母とやや粗い長石・石英を含む。焼成は良好。ロクロナデ成形。底部糸切り。口唇部はやや外反。No249・266・312・313は、甕の同一個体の大きさである。色調は、茶褐色で、胎土には、銀雲母、長石・石英を含む。焼成は良好。外面は、ハケで横・縦・斜方向にナデていて、内面は、口唇部よりハケで横ナデしている。内面口唇部から胴中央部にかけてオコゲが付着している。輪積痕が顕著に見られる。No252・258は、坏底部片で同一個体。色調は、明褐色で、胎土には、銀雲母とこまかい長石・石英を含む。底部糸切り。No272・299・301は、坏5分の1個体で、色調は、明褐色で、胎土には、金雲母、長石、石英を含む。焼成は良好。ロクロナデ。底部糸切り。口唇部はやや外反する。No282・295・317は、甕の同一個体で、口縁部・胴上部・底部である。色調は、明褐色で、胎土には、金雲母、長石、石英を含む。焼成は良好。内外ともにナデ成形。内外面口唇部付近に、センイの圧痕が若干見られる。

以上の土師器は、坏及び甕で、色調は、明褐色が主で、胎土には、金雲母・長石・石英を含む。坏では、口唇部は、やや外反し、底部は糸切りで、ロクロ成形である。甕は、大型と中型の二個体である。成形、器形、底部等の観察から、十二ノ后遺跡の編年図(第14図)によると、IX～X期に属し、11世紀半ばから12世紀前半に位置付けられる。

2. 内黒土師器

当遺跡からは、坏のみが出土している。

No201・329は、底部片で、色調は、明灰褐色、胎土には、銀雲母・長石・石英を含む。焼成は良好。ロクロ指ナデ成形で、内面は、暗文に近いヘラのかき上げがされている。糸切り底。No244は、口縁部片で、色調は、明褐色、胎土には、銀雲母とこまかい長石・石英を含む。焼成は良好。ロクロ指ナデ成形で、内面口唇部に横位の雑なヘラミガキをしている。口唇部はやや外反する。No255は、口縁部片で、色調は、明褐色、胎土には、銀雲母とこまかい長石・石英を含む。ロクロ指ナデ成形で、内面には雑な暗文がつけられている。No257・267は、底部片で、色調は明褐色、胎土には、銀雲母・長石・石英を含む。焼成は良である。ロクロ指ナデ成形。



第14図 十二ノ后遺跡における奈良・平安時代の土器編年
 (「中央道埋文報告書—諏訪市その4—」より抜粋)

内面に若干ヘラナデ痕が見える。糸切り底。No.259は、口縁部片で、色調は、暗褐色、胎土には金雲母とこまかい長石・石英を含む。焼成は良好。ロクロ指ナデ成形。内面には雑な暗文がある。口唇部はやや外反する。No.286は、口縁部片で、色調は、明褐色、胎土には、長石・石英を含む。焼成は良好。ロクロ指ナデ成形。口唇部はやや外反する。No.298は、口縁部片で、色調は暗褐色、胎土には、銀雲母、長石・石英を含む。焼成は良好。ロクロナデ。No.314・248は、坏3分の1個体で、色調は、暗茶褐色、胎土には、銀雲母、長石、石英を含む。焼成は良好。ロクロ指ナデ成形。外面胴部下半にオコゲが付着する。底部は糸切り。口唇部は、破損後、磨滅させ、凝口縁化し、二次利用している。

以上の内黒土師器坏は、器形、成形、底部、暗文等の観察により、前記報文のIX～X期に属し、11世紀末から12世紀半ばに位置付けられる。

3. 珠洲

当遺跡からは、3点の甕胴部片が出土している。

No.304は、同一個体で、釉調は、黒褐色で、地及び胎土色は、暗灰白色である。焼成は良好。ロクロ指ナデ成形。器面に対して、斜めの平行叩き目文をつけている。

成形、胎土、文様等の観察により、11世紀～12世紀のものと考えられる。

4. 天目

当遺跡からは、6点の天目が出土している。

No.198は、香炉の口縁部片と考えられ、釉調は、黒褐色、胎土色は、灰黄白色である。口唇部は、やや内傾する。焼成は良好。器壁厚は4mmを測る。No.227は、茶碗胴部片で、釉調は、黒褐色、胎土色は灰黄白色で、石英を含む。器壁厚は4mmを測る。No.284は、茶碗胴部片で、釉調は黒色で、胎土色は灰白色である。器壁厚は5mmを測る。

以上3点の内、No.226・284は、14世紀前半、No.198は、17世紀初めのものと考えられる。

5. 白瓷(灰釉)

No.246・318は、茶碗口縁部片で、4分の1個体の大きさである。内面に、淡灰緑色の釉が付着(施されたものか不明)し、胎土色は、明灰色である。口唇部は、やや外反する。焼成は良好。No.277・320は、茶碗底部片で、釉調は、淡灰緑色、胎土色は、灰白色である。ヘラ削り後高台をつけている。内面底部には、釉が2mm前後、たまっている。焼成は良好。

以上2点の白瓷は、10世紀初めの東濃産のものであると考えられる。

6. 施釉陶器

本遺跡からは、15世紀のものと、18世紀のものが出土している。

No.231は、茶碗(?)口縁部片で、釉調は淡緑色、胎土色は暗灰色である。焼成は良好。器壁厚は、4～5mmを測る。口唇部は外傾する。No.262は、灯明皿口縁部片で、釉調は灰緑色、胎土色は灰色である。焼成は良好。器壁厚は、4mm前後である。釉は、口唇部のみに施す。No.337は灯明皿口縁部片で、釉調は、淡緑色、胎土色は、灰白色(口唇部は暗灰色)である。焼成は良好。口唇部はやや内湾する。釉は、口唇部のみに施す。器壁厚は、6mm前後である。No.328は、浅鉢8分の1個体で、釉調は、淡緑色で、内外ともに釉だまりがある。胎土色は、灰黄白色である。焼成は良好。底部へう削り。二重口縁をもつ。

以上は、いわゆる黄瀬戸と呼ばれるもので、15世紀に美濃・瀬戸で製作されたものと考えられる。

●No.216・238・339は、すり鉢の口縁部及び胴部片である。No.216は、口縁部片で、釉調は、こげ茶色、胎土色は、淡黄白色で交雑物含む。焼成は良好。No.238は、胴部片で、釉調は、暗黒褐色、胎土色は、灰白色で長石を含む。焼成は良。器壁厚は1.1cm前後である。No.339は、口縁部片で、釉調は、緑褐色、胎土色は淡黄白色で長石・石英多し。焼成は良好。口唇部は二重となっている。

以上のすり鉢も、黄瀬戸と同時代の15世紀に美濃・瀬戸で製作されたものと考えられる。

●No.187・188・214・341は、灯明皿口縁部片である。No.187は、釉調は、白色、胎土色は、灰黄白色である。焼成は良好。口唇部を肥厚させている。器壁厚は2～4mmを測る。No.188は、釉調は、茶褐色で、胎土色は、灰黄白色である。焼成は良好。口唇部を若干肥厚させている。器壁厚は、3mmを測る。No.214は、釉調は、つや消しの茶褐色、胎土色は、暗灰色である。焼成は良。口唇部を肥厚させている。器壁厚は3mm前後である。No.341は、釉調は、茶色で、胎土色は灰黄白色である。焼成は良好。口唇部に横走の沈線が入る。器壁厚は、4mm前後である。

●No.219は、皿底部で、釉調は、灰白色、胎土色は灰黄白色である。へう削り底。焼成は良好。No.263は、茶碗底部片で、釉調は、淡灰緑色、胎土色は、灰白色で交雑物含む。焼成は良好。へう削り後、高台をつけている。No.308は、茶碗底部片で、釉調は、茶褐色、胎土色は、灰白色である。底部にも釉が付けられている。へう削り後、高台をつけている。焼成は良好。No.332は、織部の碗胴部片と考えられ、釉調は、黄白色の地に、呉須で絵を付けている。胎土色は、黄白色である。焼成は良好。

以上の灯明皿及び皿、茶碗、碗は、18世紀に美濃・瀬戸で製作されたものと考えられる。

7. 染付陶器

当遺跡からは、6点の染付陶器が出土している。図化したものは1点もない。全体的に、茶

碗の破片で、釉調は、白色で、胎土色も白色である。酸化コバルトで、絵が付けられ、焼成もよい。

これらの資料は、18世紀に有田で焼かれたものと考えられる。

8. 銀製品

No.261は、きせるの雁首部で、鉄及び真ちゅう製か判断しがたい。接合部には、鉛状の付着が見られる。中世～近世のものであろう。

9. 古銭

No.327は、熙寧元宝である。宗神宗熙寧年間(1067～1085)のものである。

10. 石器

当遺跡からは、打製石斧、縦型石匙、石鏃、火打石が各々出土している。火打石は、No.293が当り、1号住内より出土し、石英碑である。側面を打って使用している。1号住に伴うものであろう。その他の石器は、縄文時代の所産であると考えられる。

第2節 遺 構

第1節の遺物及び当遺跡の性格(中世～近世)より、各遺構を次のように、現在的には、時代判定をしておくが、今後の青木城遺跡(昭和59年度発掘調査予定)の調査結果により明確となると考える。

第1号住居跡は、出土した土師質土器、内黒土師質土器等により、11世紀末から12世紀半ばにかけての遺構と考えられる。

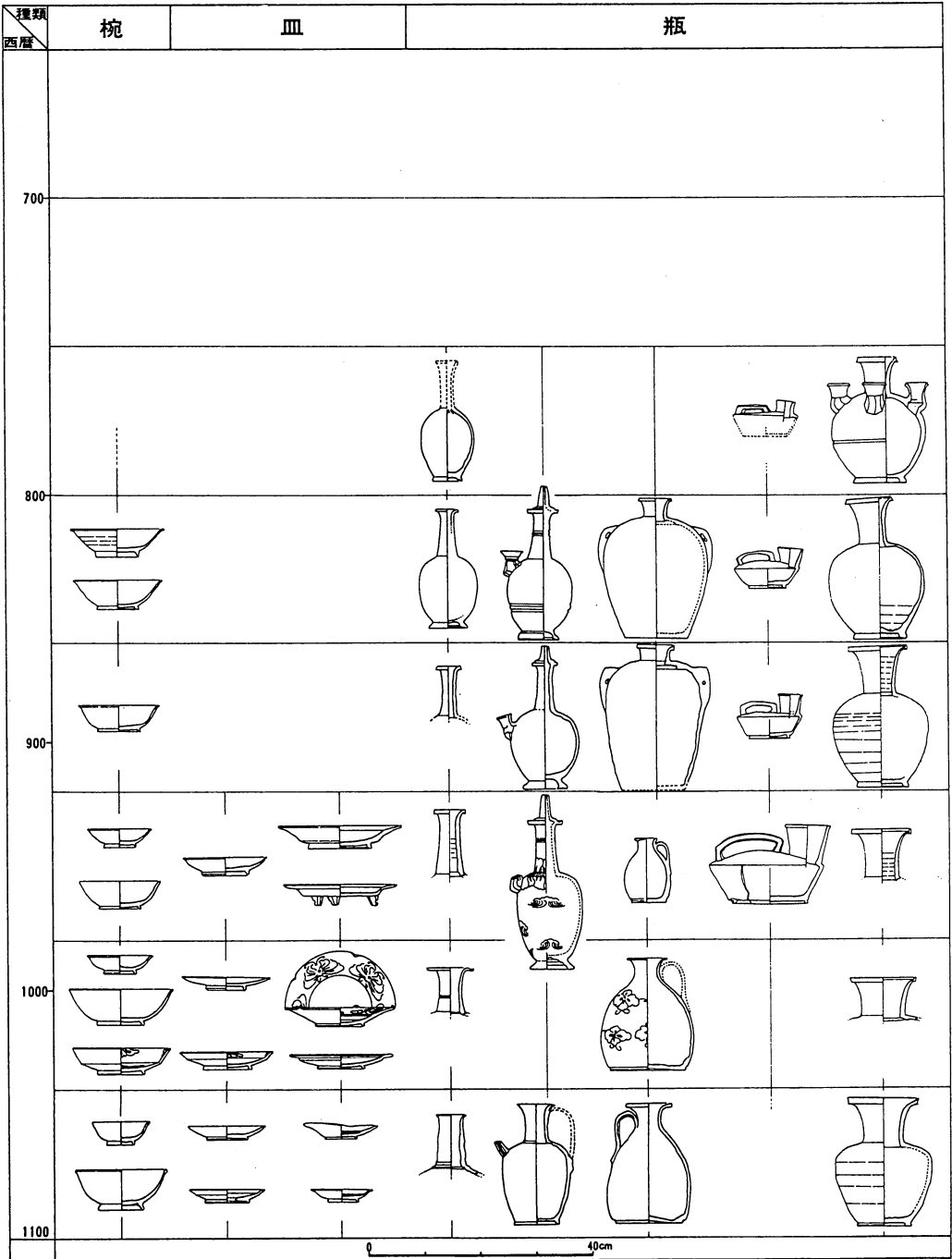
北の堀は、黄瀬戸等により15世紀前半から半ばの遺構と考えられる。

南の堀は、出土遺物が、18世紀の白磁片が、1点出土しただけであるので、明確な時代は不明であるが、構築は北の堀と同様に考えられる。

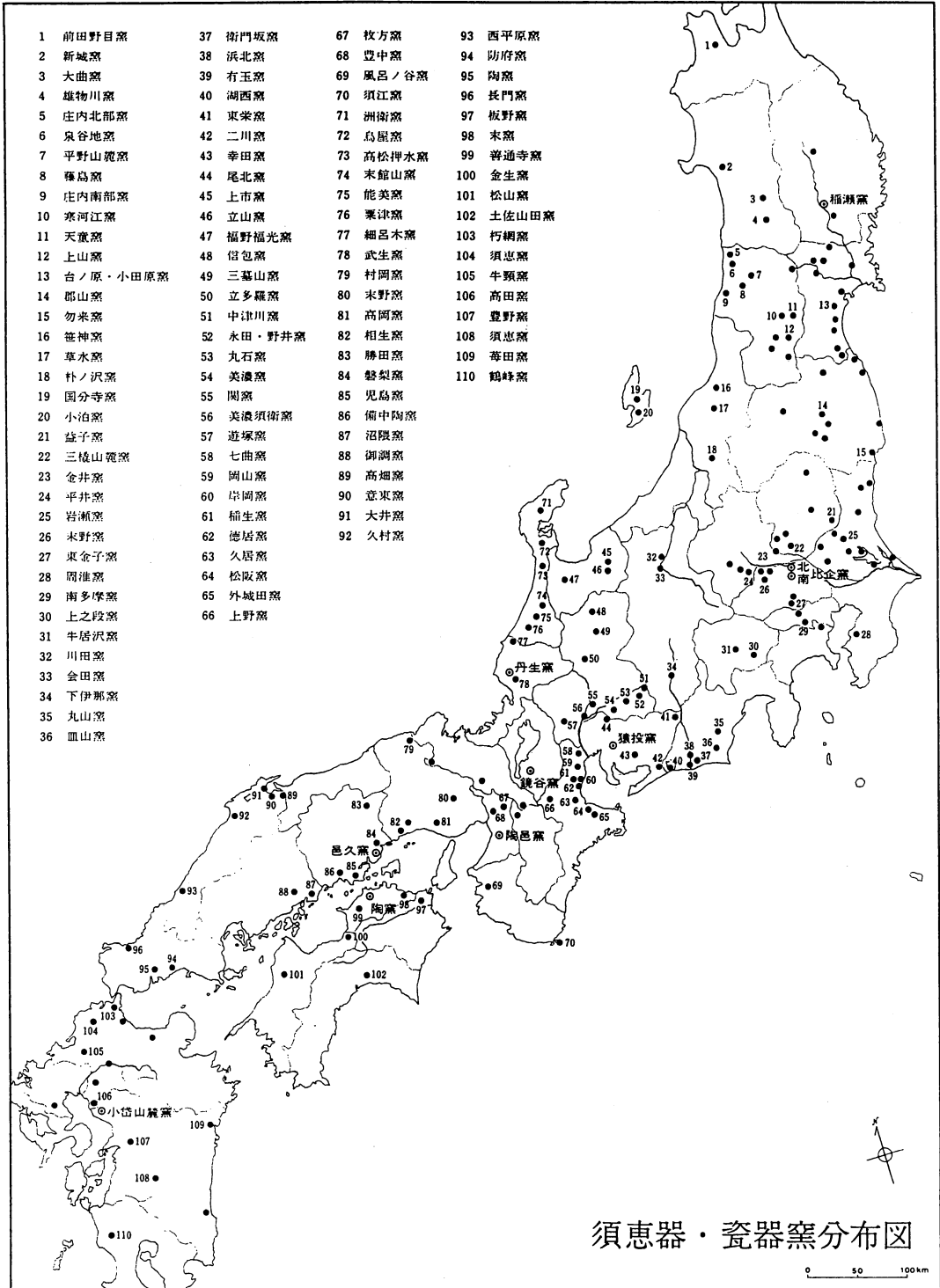
第1号集石址は、18世紀の陶器が出土しているが、他の遺構との関係から、中世～近世の遺構と考えられる。

第1号土壌は、出土遺物はない。周辺より天目、黄瀬戸等が出土しているが、遺物の時代と同時代とは言い難い。現在的には、中世～近代と幅をもたせて考えたい。

白瓷編年図



第15図 白瓷編年図（「日本陶磁全集6」より抜粋）



須恵器・瓷器窯分布図

第16図 須恵器・瓷器窯分布図（「土師器・須恵器」日本の陶磁
古代・中世篇Iより抜粋）

第3節 遺跡名「青木」に関すること

●植物名「あおき」

「植物としての青木はスズキ科の常緑灌木であるが、一般的には常緑樹を総称し、東北地方では針葉樹の杉・松の類をもっぱら青木と称した。近世の東北諸藩ではその青木を有用樹として保護し、天然生青木の減限著しい中期以降はいずれもこの育成にとめた」

：引用文献「国史大辞典1 あ・い」 吉川弘文館

●「青木」

『諏訪御符礼之古書の寛正六年(1465)五月会の件に「左頭、青木、代官深井肥前守治光」とあり、続いて文明二年(1470)花会の件に「加頭、花会宮頭、青木、海野知行、代官深井肥前守治光」とあるので、この頃現東部町海野に本拠を置いていた東信濃の豪族海野氏の知行する所であったとがわかる。これ以降文明六年・十一年・十五年、長享二年(1488)頃まで諏訪御礼之古書に同様の記録がみえ、天文十年(1541)海野氏滅亡まではその支配下にあったと想像される。』

：引用文献「長野県の地名」日本歴史地名大系20 平凡社

●「牛ヶ城墟」

「本村(富縣村)の午の方字三堂入の山峯にあり。東西五間、南北五間、但回字形をなし、遺濠南北に周り、長三十七間四方、嶮岨なり。建築年曆詳ならず。天正元年牛山道賢、當郡東伊那村青木城に居し、同二年本城へ轉移す。同十年仁科五郎信盛の爲めに、當國高遠申山城に於て戰死す。其末族今牛山眞吾の家なりと云傳ふ。」

：引用文献「長野縣町村誌 南信編」 名著出版

●「東伊那村 管轄沿革」

「古時詳ならず。同郡笠原庄と云ふ。元暦元甲辰年笠原平五頼直、高遠城を築き、暦應元年九月七日尊氏蜂起の時、高遠太郎家親之を領す、其後天文年の始め、其長男義久の時、同郡司小笠原孫三郎信定と不和を生じ、欲及矛楯の際、當國木曾福島の領主、木曾左京大夫義康、義久の孤勢を伺ひ、高遠城を襲ふ。城主義久不克。茲に於て高遠氏、百九十四年にして沉滅す。爾來義康の采邑となり、城代千村内匠之を支配す。後天文十八年七月十六日、甲斐國武田信玄の爲めに落成す。同十七日仁科信盛之を領す。天正十壬午年、織田信忠の爲めに戰死す。同年より藤澤の城主、保科甚四郎領主となる。(以下略す)」

：引用文献「長野縣町村誌 南信編」 名著出版

- 「マト一」一当遺跡の小字名を「的(マト一)」と呼ぶ

「(1)狭間, 小平地」

「マトバ」

「(1)広場 (2)弓神事に射手を出す家〔的場・馬ト場・間戸場下〕」

第V章 ま と め

4週間余りにわたって、炎天下のもと、また時には雨天の中で、発掘調査に作業員として御理解と御協力をいただき参加して下さった方々や地元の方々に心からお礼申し上げます。

遺構としては、第1号住居跡、堀址2条、集石址、土壌が検出され、遺物としては、土師質土器、内黒土師質土器、天目、黄瀬戸、白瓷、すり鉢、施釉陶器、染付陶器、古銭、きせる雁首等が出土し、15世紀から17世紀・18世紀にかけての遺構・遺物として位置付けられる。

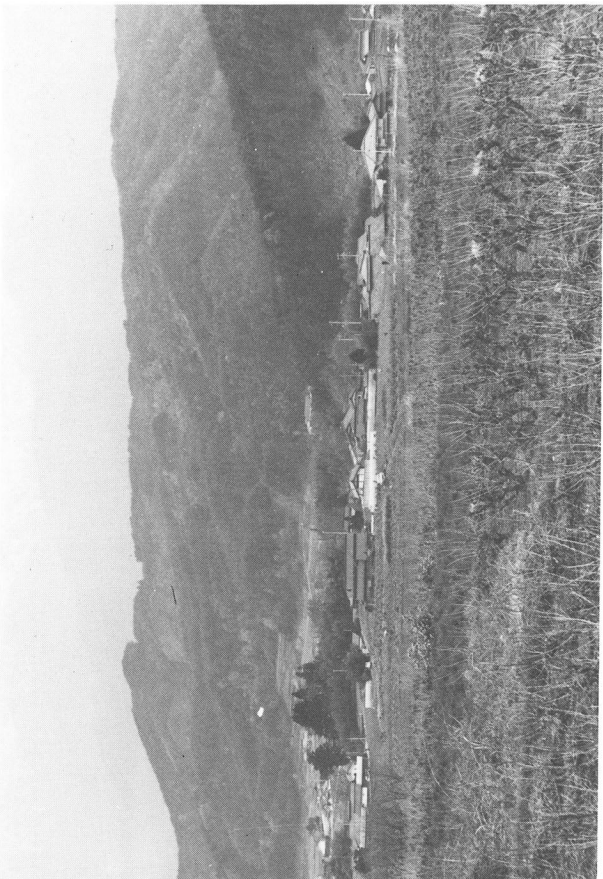
しかし、青木城の周辺遺跡—青木遺跡は、中世末の遺跡と考えられているが、その時期に該当する遺物は出土しなかった。この点に関しては、今後の青木城遺跡の発掘調査(昭和59年度)の成果に期待したい。

末文ながら、陶磁器鑑定をして下さった瀬戸市歴史民俗資料館長宮石宗弘氏、同学芸員藤澤良裕氏に対して、心から感謝の意を申し上げます。

参 考 文 献

- 1 長野県教育委員会「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—下伊那郡阿智地区—」昭和45年度
- 2 長野県教育委員会「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—下伊那郡高森町地内その1—」昭和46年度
- 3 長野県教育委員会「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—伊那市西春近—」昭和47年度
- 4 長野県教育委員会「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—諏訪市その4—」昭和50年度
- 5 箕輪町教育委員会「木下猿楽遺跡—緊急発掘調査報告書—」昭和51年度
- 6 長野県教育委員会「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—岡谷市その4—」昭和52・53年度
- 7 松本市教育委員会「長野県立松本工業高等学校遺跡—緊急発掘調査報告書—」昭和54年度
- 8 中川村教育委員会「長野県上伊那郡中川村西ヶ原遺跡—緊急発掘調査報告書—」昭和54年度
- 9 宮田村教育委員会「駒ヶ原下長野県上伊那郡宮田村駒ヶ原下遺跡—発掘調査報告書—」昭和54年度
- 10 飯島町教育委員会「高尾第2・本郷中原遺跡—埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—」昭和56年度
- 11 駒ヶ根市教育委員会「上塩田遺跡—緊急発掘調査報告書—」昭和58年度
- 12 駒ヶ根市教育委員会「栗林神社東遺跡—緊急発掘調査報告書—」昭和58年度
- 13 飯島町教育委員会「唐澤城県営圃場整備事業（昭和50年度）埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」昭和51年度
- 14 上田市教育委員会「塩田城跡—第2次発掘調査概報—」昭和52年度
- 15 長野県教育委員会「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市その5—」昭和52・53年度
- 16 長野県教育委員会「長野県の中世城館跡—分布調査報告書—」昭和58年度
- 17 小室栄一『中世城郭の研究』人物往来社 昭和40年
- 18 出光美術館『宋代の陶磁』昭和54年
- 19 小山富士夫『青磁』陶磁大系36 平凡社 昭和53年
- 20 榎崎彰一編『瀬戸美濃』日本陶磁全集9 中央公論社 昭和51年
- 21 榎崎彰一編『白瓷』日本陶磁全集6 中央公論社 昭和51年
- 22 榎崎彰一編『黄瀬戸瀬戸黒』日本陶磁全集14 中央公論社 昭和52年
- 23 榎崎彰一編『常滑渥美』日本陶磁全集8 中央公論社 昭和52年

版 圖



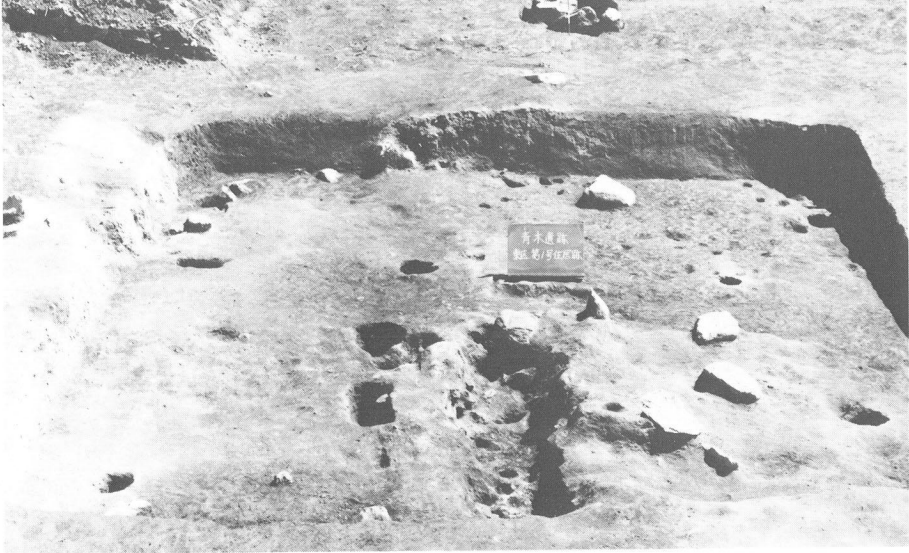
1. 第2次調査区全景



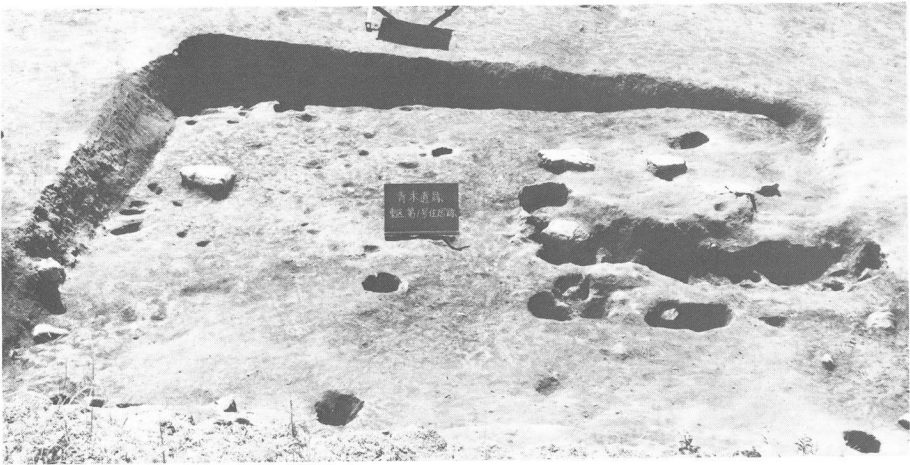
2. 遺構全景



3. グリット掘り下げ状態



4・5. 第1号住居跡



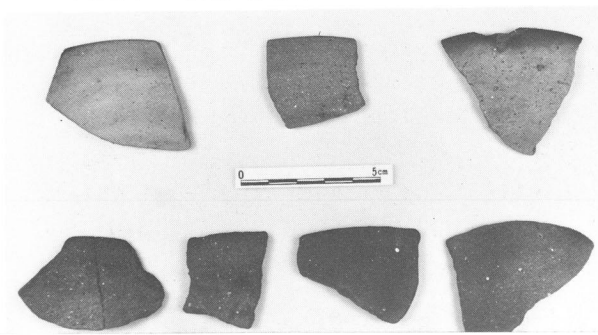
6. 同上セクション

7. 同上遺物出土状態



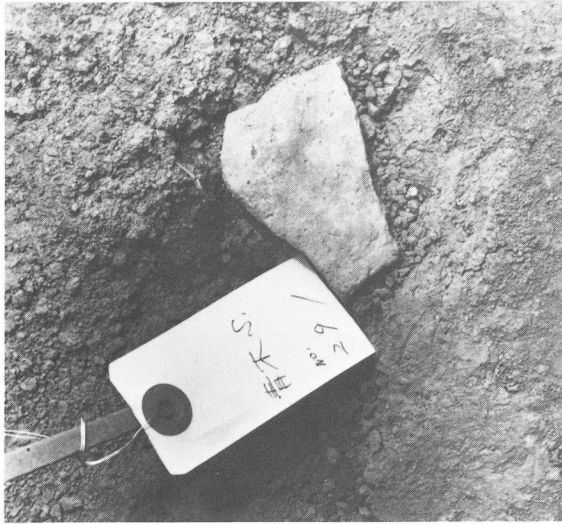
8. 同上出土土師器(内黒)

9. 同 左





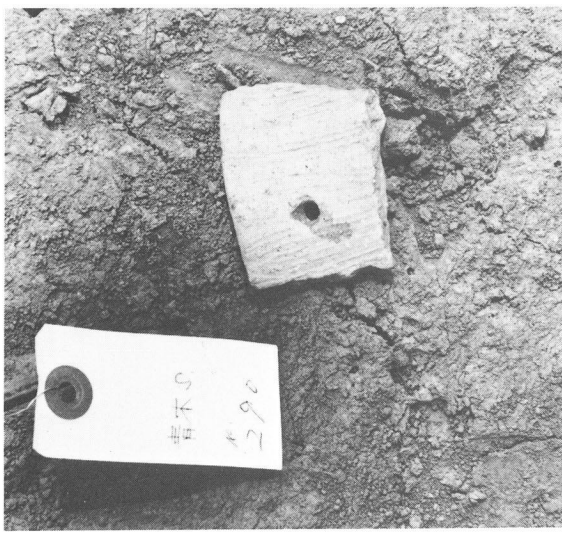
12. 同左 No. 258



15. 同左 No. 291



11. 同左 No. 255



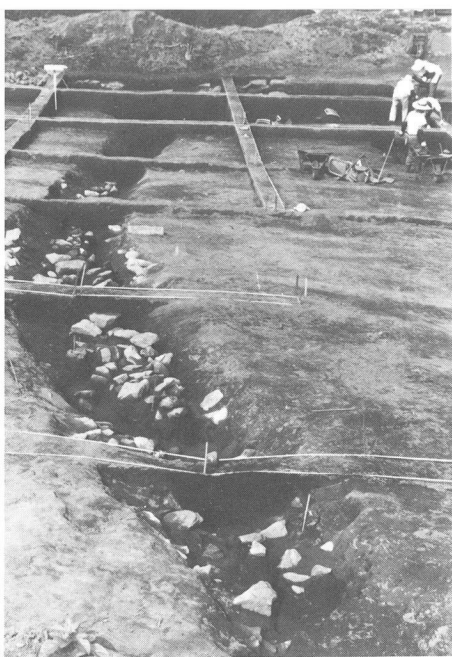
14. 第1号住居周辺出土遺物 No. 290

10. 第1号住居跡出土遺物 No. 251



13. 第1号住居跡出土遺物 No. 268





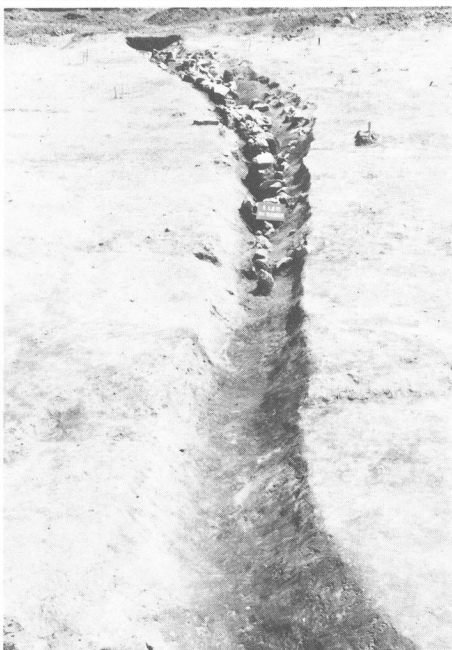
16・北の堀ⅠとⅤベルトセクション設定状態



17・同左、Ⅴベルトセクション



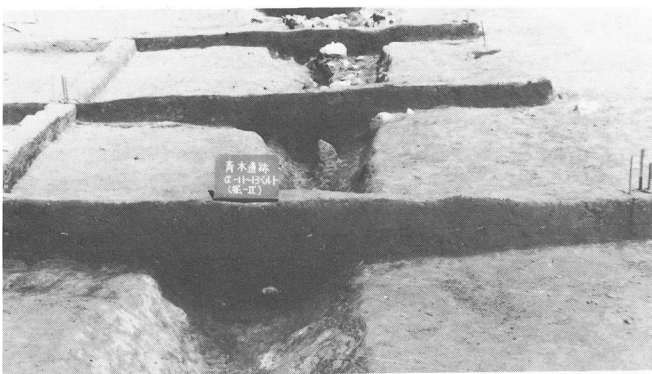
18・同上、Ⅳベルトセクション



22・北の堀礫群出土状態



19・同上、Ⅲベルトセクション



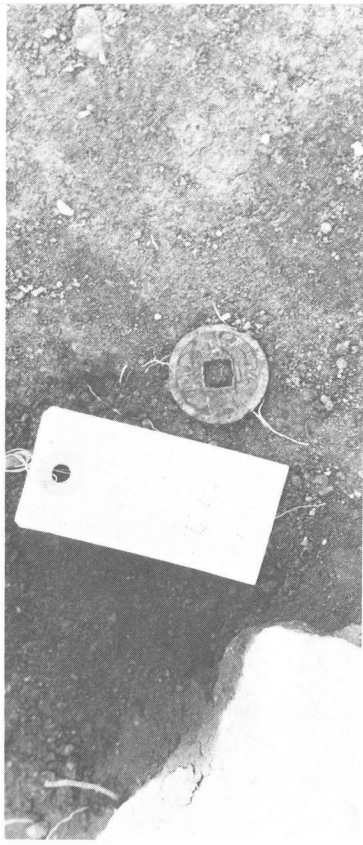
20・同上、Ⅱベルトセクション



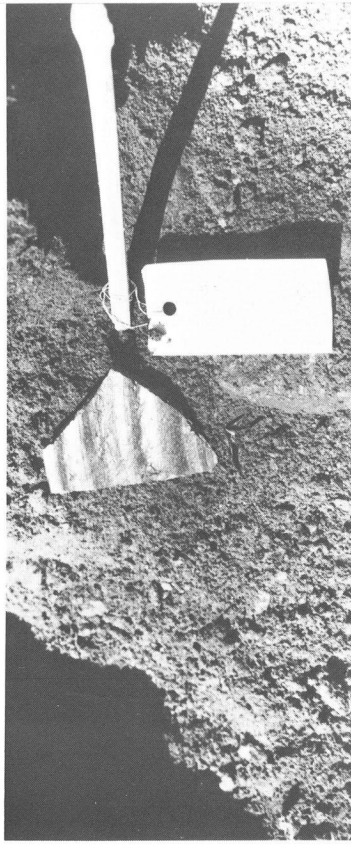
23・同上、掘り下げ完了状態



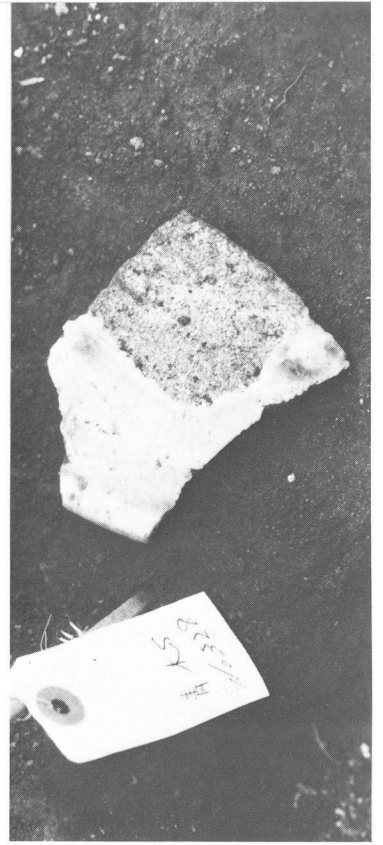
21・同上、Ⅰベルトセクション



25. 北の堀出土遺物 No.327



26. 同上 No.339



27. 同上 No.328



24. 北の堀(右)及び第1号住居跡(左手前)近景



28. 北の堀出土遺物 No.329

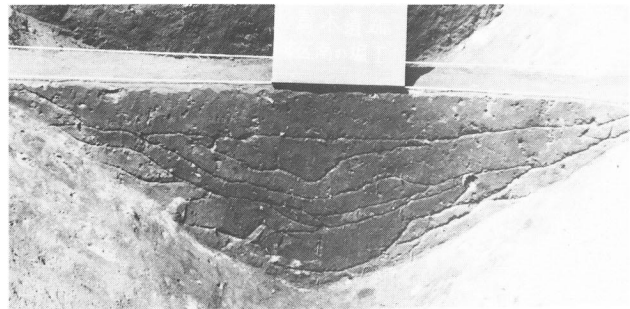


29・南の堀I〜IVベルト設定状態



35・同左調査完了状態

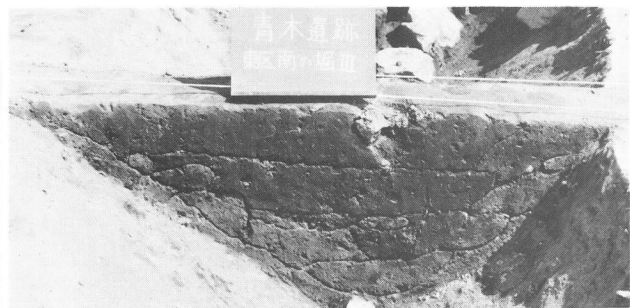
30. 同29 Iベルトセクション



31. 同29 IIベルトセクション



32. 同29 IIIベルトセクション



33. 同29 IVベルトセクション



34. 南の堀石集出土状態

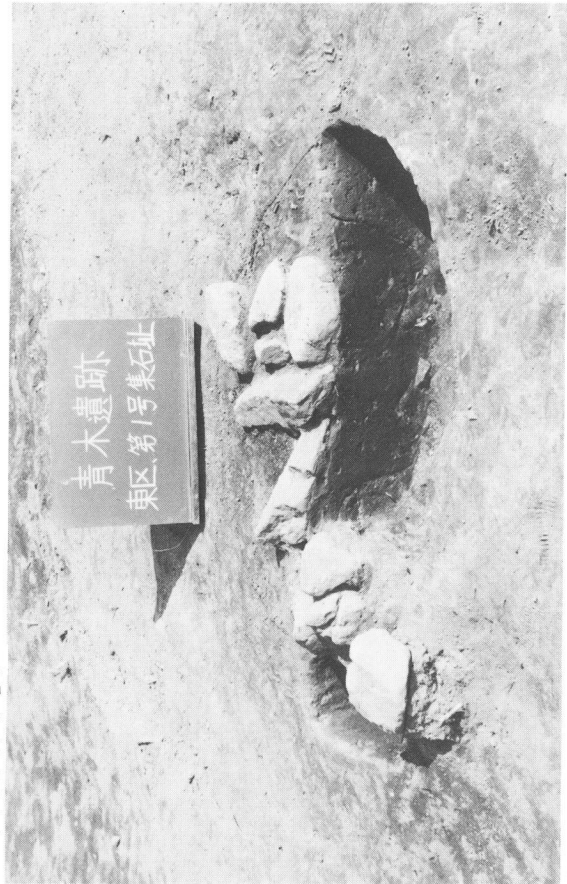




36. 第1号集石址



38. 第1号土壇



37. 同上セクション



39. 同上セクション



40. 調査区北東の馬頭観世音

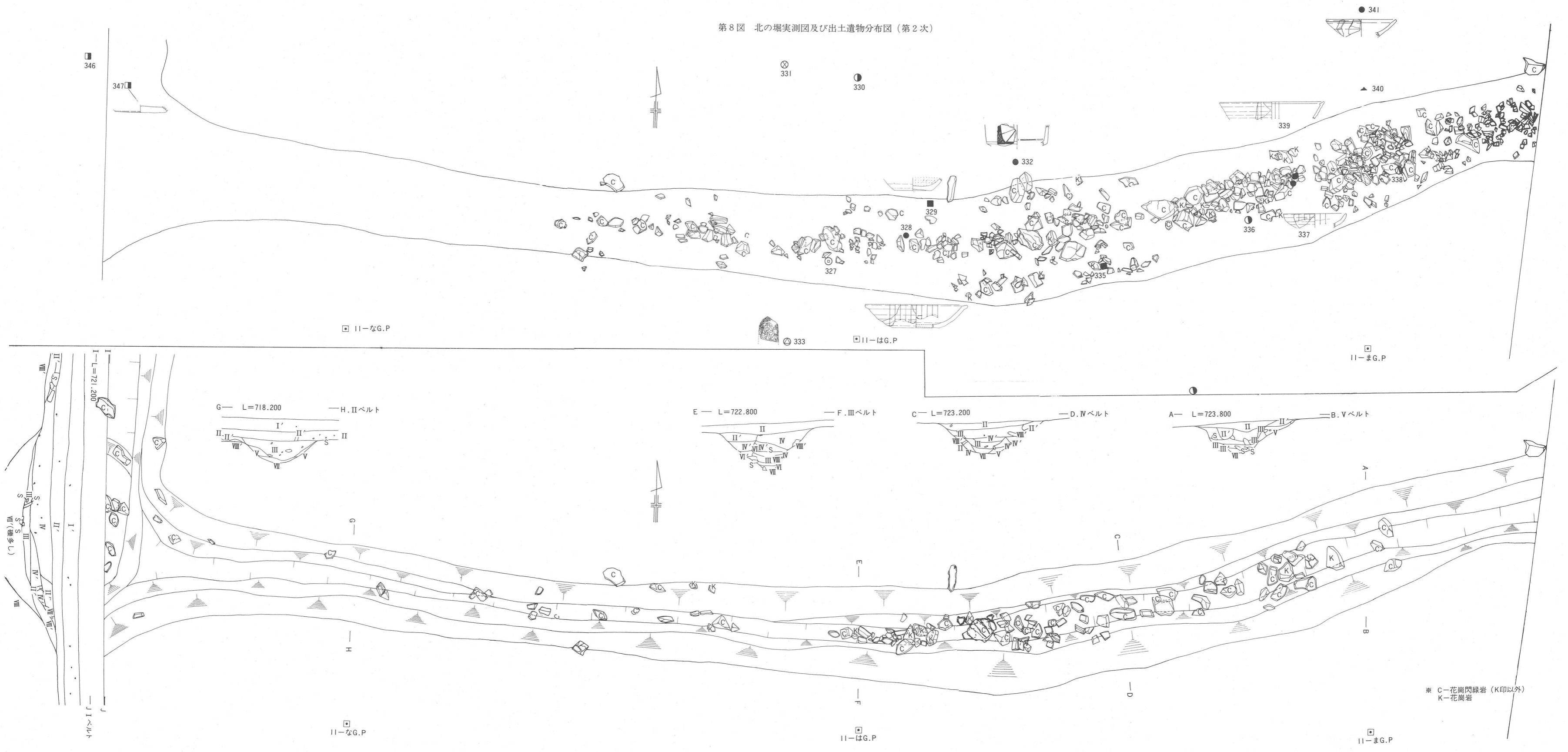
41. 駒ヶ根郷土史講座見学風景





第8図 北区遺構実測図及び遺物分布図(第1次)

第8図 北の堀実測図及び出土遺物分布図（第2次）





第10図 南区A~Pグリッド内遺構及び第1号集石址実測図並びに遺物分布図(第1次)



第12図 第2次調査区遺構外周図及び遺物分布図 (1:60)

青 木 遺 跡

—— 第 1 ・ 2 次緊急発掘調査報告 ——

昭和59年 3 月20日 印刷

昭和59年 3 月25日 発行

編集 駒ヶ根市上穂南 2 - 15市立駒ヶ根博物館内
駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会 (第 1 ・ 2 次)

発行 第 1 次 伊那市青木町伊那合同庁舎内
南信土地改良事務所
駒ヶ根市赤須町20-1
駒ヶ根市教育委員会

第 2 次 文化庁
長野県教育委員会

印刷 長野市中越293番地
ほおずき書籍株式会社
